
悪魔と天使のうらおもて

新城寺ハヤト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔と天使のうらおもて

【Nコード】

N4353C

【作者名】

新城寺ハヤト

【あらすじ】

この話は俺こと渡辺和也が子供の頃、実際に起きたことを綴った話。それまで普通の小学生だった俺は、6年生になった時を境にアリスっていう天使界の跡取り娘とチルドっていう魔界の跡取り息子と出会う。学校生活を送っていく中で、最初は人間そっくりで生活ぶりも変わらなかった彼らの秘密を俺は知ってしまうことになる。最後の小学校生活、もっと穏便にすごしたかったんだけど、とんでもない事件に巻き込まれていく俺。無事に小学校生活を終わられるだろうか？

現在（1）

進化の極みに達した街並みを車で移動しながら、俺はふとあいつらのことを考えていた。

あいつらのことを考えるのは今年に限ったことではないのだが、毎年この時期になると、ふと思い出すのだ。

そう、これは俺が子供の頃の話。

第1話　奇特な二人

俺が子供の頃住んでいた町は――町というよりは村と言ったほうが近いな――それなりに気候も温暖で農業が盛んなところだった。学校も普通に小・中・高とあって、町の中央公園は今でも小学生の集いの場となっている。あいつらと出会ったのは小学校の最後の一年間のときだ。その時の自己紹介の様子は今でもはっきりと覚えている。

「はい、では最初はクラスの皆と仲良くなるために自己紹介をしましょうね」

担任の先生が笑顔で告げる。

クラスメートの中にはブーイングをとばす者、自己紹介で紹介する内容を一生懸命紙に書いている者、新しくできた友人とのおしゃべりに没頭していて気がついていない者、様々だった。

「名前の順で最初はアリスちゃんね」

先生は窓側の一番先頭に座っているツインテールの少女に壇上にかかるように手招きをした。少女は楽しそうに、そして嬉しそうに壇上に上がった。

「出席番号一番のアリスです。みんな元気〜!？」

クラスメートの半分は知らない人間だったろうに彼女の自己紹介の第一声はそれだった。クラスメートの中には声を返すものもいたが、半分以上は無反応だった。

「うーん、かくなり元気がないぞお!ま、いいや」

おい、いいのかよ!

俺は思わず突っ込みを入れたくなったが、頭の中だけでそれをとどめた。

「わたしの元気でみんなをいっっぱい幸せにするのが目標です。だから、みんな仲良く元気にいこうね！」

アリスは最後に「いえーい」と右手親指を立ててポーズをとった。面白かったのかみんな笑っていた。もちろん、俺もおかしくて笑っていた。なんだか理由はよくわからなかったけど憎めない奴である。そう思った。

自己紹介はどんどん続き、クラスメートが一人一人自分の個性をアピールしていく。そして、真ん中辺りでとうとう奴の出番が来た。

「はい、次は出席番号十九番のチルド君」

奴は名前を呼ばれたのにもかかわらず無反応だった。先生がもう一度名前を呼ぶが、やはり奴は無反応だった。どのクラスにもこういう奴がいるんだよなあ、と俺は頭の中で思いつつチルドが動くのを待った。しかし、三分くらい経っても動く気配がないのでとうとう先生が奴の机の前まで歩み寄った。

「チルド君、君の自己紹介の番よ？」

先生が近くで言っても反応なし。

チルドの前に座っている席の奴がチルドの目の前で手をひらひらと振ってみる。

「先生、こいつ寝てるよ」

これには流石の先生も驚いたようだ。目を開けて寝るなんていう特技があることは知っていたが、まさかその年齢でそれをマスターしているとは。チルドは意外と芸人向きなのかなと当時の俺は思っていた。

結局チルドは先生に肩を揺さぶられることで眠りから覚醒した。

「チルド君、君の自己紹介の番なんだけど……」

先生が苦笑いをしながらつぶやく。

「……わかった」

チルドは小さく頷くと、てくてくと壇上に向かって歩き出した。さっき起きたばかりだというのに、その足取りはふらついてなく、目もぼんやりとはしていなかった。まさかこいつ寝ていたふりをし

ていたでは？これは俺のみならずクラスメート全員が思っていたらしい。そして、チルドの自己紹介が始まる。

第2話くチルドの自己紹介く

「名前、チルド。……………終わり」

早！

これまた突っ込みの入れられる自己紹介だった。いかにも何か言おうと考えていました風味のその間は何なんだ！？結局何も言わないし。

間がなかったらおそらく二秒で終わっていたぞ、今の自己紹介は。流石に先生も見かねてチルドに「もう少し長く」とか「好きな食べ物とか教えてあげて」とかなんとかフォローに努めている。

「好きな食べ物……」

ふんふん、好きな食べ物は？

「……………」

『……………』

クラス内に静寂が起こる。こういう奴に限って実は高級なものが好きだったり、あるいは逆に庶民的なものが好きだったりするのだ。

「……やっぱりやめた」

ドドドド――

クラスメート達と先生が盛大にこけた。あれだけ間を持たせておいて「やっぱりやめた」だとお？俺は呆れつつも若干怒りを覚えた。

「だって……」

お、まだ続きがあるのか？クラス内が再び静まる。

「……………」

『……………』

「……やっぱりやめた」

ドドドド――

再びクラス内で転げ落ちる音が響いた。

一体何なんだ、こいつは？皆、同じフレーズを二度も使ってまでお前の好きなものを聞きたかったのに、この扱いとは。しかし、もう俺たちには突っ込む気力もなかった。先生もまた同じで「これでいい？」と問いかけるチルドに対して機械的に頷くことしかできなかった。

と、これがアリスとチルドとの最初の出会いである。
感動もくそもない。

第3話くアリスとチルドく

新しいクラスになってから一ヶ月が経った。クラスメート達はお互いに慣れ親しみ、喧嘩もすれば、馬鹿をやって先生を怒らせたりする日々が続いた。

そうそうアリスが言っていた目標、あれは彼女が宣言してからわずか一週間で達成されていた。もともと社交的だし、愛想はいいし、元気がいいし、挙句の果てには男のグループにも混ざって遊んでいたほだったので男女共にすぐに仲良くなった。

俺達のほうも最初は女を男のグループに混ぜるものかと思い、彼女を拒絶していたが、彼女の身体能力を買い、仲間に引き入れたのだ。そして、アリスはときどきあまり運動ができない子を連れてくるときもあり、俺達に女の優しさみたいなのも教えてくれた。きつと、アリスには他者を惹きつける力があるのだ。

当時、俺が入っていた男子グループ内では、アリスのことをキューピッドと呼んでいたくらいだからな。まさか、その後でその言葉が本当になるとはこの時はまだ夢にも思っていなかったがな。

一方チルドのほうだが、こいつは授業中いつもぼうつとしている。何か考え事をしているわけではなくただ単に中を見上げているだけだ。その証拠に俺は横の席にいる奴の目を盗み見してみると、綺麗なオッドアイには何も映っていなかった。せっかく綺麗なオッドアイなのにもったいないなあと思った覚えがある。

授業が終わり休み時間になるとこいつはいつも教室を出てどこかにいく。そのどこかを知る者はクラスメートの中では一人もいなかった。まあ、元々影が薄い奴だったし、俺達は俺達で校庭に遊びに出ていたから気になることもなかった。あいつが話しかけてくるまでは……。

「ねえ、ちょっといいかな？」

ある日、アリスに呼び出しを喰らった。

ここだけの話、アリスは容姿が非常にかわいく、性格も明るいことから男子に非常に人気があった。つまり、これが何を意味するかは大体予想がつくはずだ。俺は男子連中に疎みと妬みの両方が入った視線を受けながら外に出なければいけなかったわけだ。

外に出た俺とアリスは、廊下では何なので学校の屋上で話をした。「俺に用事って何？」

なぜだか、ちょっと顔が熱かった。

「あのさ、チルド君のことなんだけど…」

ガン！

若干期待をしていた俺の気持ちが一気に崩れ落ちた。

「あ、アリスはチルドのことが好きなのか？」

感情の高ぶりのせいで思わずそう言ってしまった。

「へ！？ち、違うよ。そうじゃないよ！そうじゃなくて……」

アリスは顔を赤らめ、慌てて否定をする。首を大きく振っているため彼女のツインテールも大きく左右に揺れる。こうやって一対一で話してみるとほんとにかわいい子だなと思う。明るく活発でたまに男勝りなところもあるのに、やはりこの子も女の子なんだという実感が湧く。

「そうじゃないならいったい……」

俺はいまひとつアリスの意図が読めなかった。新学期からの一ヶ月間で見た感じ、こいつとチルドはほとんど接点がなかったような気がするのだが。

「うん、だからさ、チルド君をクラスになじませてあげようと思っ
て」

なるほど、そういうことか。俺は納得した。別にアリスはチルドが好きなのじゃないんだな。

「少しホッとした」

「え、何が？」

俺のつぶやきに彼女は首を軽く傾けるが俺は「なんでもねーよ」と言っ
てアリスに話の続きを促す。

「それで具体的にはどうするんだ？」

それを聞くとアリスは腕組みをして首を斜めに傾けたままになってしまった。

「とにかく教室に戻ろうぜ」

「うん、そうだね」

アリスは頷くと、俺の後について屋上の階段を下った。

第4話 第一回チルド引きこもり防止作戦

「よう、チルド」

「こんにちは、チルド君」

昼休み、俺とアリスは一人で座っているチルドに声をかけた。チルドは一瞬、きょとんとした顔で固まっていたが、すぐに「あ…」と反応をした。

「……誰だっけ？」

ドド――

俺達は勢いよく机のチルドの机の前に突っ伏した。ま、まあいつもこんな調子だから人の名前を覚えるわきやないわな。

「俺はカズ。出席番号三十一番の渡辺和也だ」

「あたしは一番のアリスだよ。よろしくね、チルド君」

俺達はまるで新学期初期のような会話をした。

「あ、うん。よろしく……」

チルドは俺たちの顔を交互に見ながらそう言った。

「なあ、チルド。もしよければこれから俺達とドッジボールでもしにいけないか？」

小学生の遊びの定番と言えばこれだろう。今はどうだか知らないが俺が子供の頃はものすごくブームだった。

「ボールを投げるのって楽しいよ！」

アリスも一生懸命にチルドを説得するが、チルドは「ああ…」とか「うーん」と言った生返事ばかりで説得は平行線を保ったままで昼休みを終えてしまった。

俺達は翌日もその翌日も説得を続けるがチルドの反応は至ってこの二種類のみだった。

こうして、第一回チルド引きこもり防止作戦会議が開かれたわけ

である。

「アリス軍曹よ、敵は予想以上に手強いぞ。何か策はあるか？」

俺達は当時はまっていた軍隊ごつこのまねをしながら会議を進めた。

「自分が思うにですね、まずは標的^{ターゲット}の動向を探るべきだと思うのです」

「その理由は？」

「おそらくターゲットは授業の合間の休み時間などにはいつも開放している図書室に行っているものと思われます。そこで図書室で本を読んでいるターゲットに接触。そしてから、本を読む悲しさなどをつらつらと述べ上げ、今度は外で遊ぶことの利点を挙げるのです。ターゲットが我々の話を聞き入れてくれたのなら必ず本を読むことに疑問を感じるはずであります。そこで最後の仕上げ、我々が彼をドッジボールに誘い外で遊ぶことの楽しさを教えるのであります」

「なるほど、それは名案だ。でかしたぞ、アリス軍曹！ようし、早速ターゲットを探しに図書室へ行くぞ！」

「イエッサーであります！」

俺に向かってかわいらしく敬礼をすると、元氣よく階段を駆け下りていった。

今思えばなんと隙だらけの作戦だろうと思う。本を読む悲しさをあげたところで、それは人それぞれだと言われればともこもないわけである。チルドの性格から考えて、それはなかったかもしれないがな。

第5話　チルドと猫

図書室に着いた俺達は扉を静かに少し開いてこっそりと中を覗き見た。なぜ、こっそり覗き見るのかと言うと、実はつい最近雨が降って外で遊べない日があったのだが、その時に図書室でかくれんぼして遊んでいて本棚の本を大量に床に落としてしまったことがあったんだ。ぬれた靴で図書室内を走り回っていたため落ちた本は靴についた泥などで汚れ、本を台無しにして図書室長にすごい剣幕で怒られたことがあったのだ。今、図書室長に見つかるのは非常にまずい。

「どうだ、奴はいるか？」

俺はひそひそとアリスに耳打ちすると、アリスは唸りながら「いないみたいだね」とつぶやく。

そんな馬鹿な。昼休みは五分ほど前に始まったばかりだぞ？

「うーん、今日は別のところなのかもしれないね」

「どうする？校庭に戻ってみんなとドッジでもするか？」

俺の提案にアリスは腕組みしながら唸った。

「今日は止めとこう。今からチルド君を探して徹底抗戦するんだから」

やはり狙いはそっちか。

「でもさ、チルドはあの通り結構強情だ。そうそう簡単に心を開いてくれるとは思えないんだけど」

「あー！カズ君までそんなこというの？それじゃ他の子と変わらないよお」

アリスは俺の顔の前にずいっと人差し指を持ってきた。

「いーい、これはあたし達に課せられた使命なの！私達がやらなくちゃ駄目なのよ！」

少し屁理屈になっているような気もするが俺は黙ってアリスの演説を聞く。

「それに少しくらい強情なほうがこっちのやる気が増すってもんよ。強情結構！だからこそ、やらなくちゃ女が廃るわ！」

「俺は男なんだけど…」

「何か言った!？」

「いえ…」

駄目だ、これ以上こいつに反論はできそうもない。それに、自分で言うておいてなんだが俺も諦める気持ちはまだそんなに強くなかった。

「わかった、付き合うよ」

「え、いいの？」

俺がそう言うと思っていなかったのか、アリスは戸惑ったように口に手を当てた。

「なんだそりゃ？別に断る理由はないんだろ」

「う、うん。ないけど……」

アリスの顔から戸惑いの表情は消えない。

「ほんとにいいの？」

「ほんとにいいよ。一人より二人で探したほうが効率がいいだろう？それにだな……」

俺はわざとらしく咳払いをした。

「上司に格好良く演説をしまさらこの仕打ちはどうかと思うがね、アリス軍曹」

俺はにっと笑った。アリスもすぐに嬉しそうに笑い「ハイであります、大佐」と合わせた。

かくしてチルド搜索が始まったわけだが、たかだか小学校の敷地内だ。そう遠くへは逃げられまい。俺達はいつがいきそうな、つまりなるべく人気のない場所を中心に搜索を開始した。

案の定、チルドは校舎の裏側の隅で猫の相手なんぞしていた。

「なんだ、君達か」

チルドは俺達の存在に気づくと、猫を抱きながらこっちに近づいてきた。みたところまだ子猫のようだ。チルドの足元にはまだ数匹の子供と母親猫がいた。

「抱く？」

チルドは俺たちに向かって言った。

「いいの？」

アリスの目がきらきらと輝いている。駄目だこりゃ、完全に猫に魅入られたな。まったく女ってのはどうしてこんな小動物を可愛がるんだ……

「君も、抱く？」

気がつけばチルドは俺の目の前にも子猫を抱いてそんなことを聞いてきた。断ることはできたんだが、場の雰囲気とアリスに勧められたことが重なって俺は子猫を抱く羽目になった。

「可愛いねえ」

アリスは自分の手の中で気持ちよさそうにしている子猫を見つめながら待ったりとした目をしている。確かに可愛いけどさ。今、俺達のすべきことではないような気がするんだが。

「カズ、猫、気に入らない？」

初めてチルドから話しかけてきた。表面からはわかりづらかったがきつと無愛想な顔をしている俺が心配になったのだろう。

「いや、そんなことはないけど……」

俺はそう言いながら指を動かして子猫をじゃれさせる。

「よかった…」

チルドはつぶやくと、頬の筋肉が緩まり優しい顔になった。

結局、この日もチルド引きこもり防止作戦は失敗に終わったのだ。しかし、作戦は失敗だったものの、俺達はチルドという少年の秘めているものについてじっくり体感することができた。こいつもまた、他者を惹きつける力があることを知ることができた。それだけでも十分だった。

下校時間になり、みんなが教室からいなくなった後俺とアリスは例によって会議を開いていた。

「私達が強引過ぎたかな」

「そうだなあ。もし、あいつをドッジに誘っていたら猫も可哀想かもしれないな」

「でも、あの猫達チルド君にとっても懐いていたよね」

アリスが昼休みのことを思い出しながら目をきらきらさせている。

「そうだな。俺さ、あいつにも誰かを惹きつける力があると思うんだ」

「それは思った。ただ、それが人じゃないだけで持っているものはやっぱり私と同じなんだね」

「やっぱりって？」

「あ、えーとなんでもないよ。忘れて」

アリスはそう言うのと、「ばいばい」と手を振りながら教室を去っていった。一体なんだというのだろうか。

まあ、何はともあれチルドの一面を知ることができた今日はとても収穫だった。今日はアリスと会議をしていたから無理だったけど明日は一緒に帰ろうって誘ってみることにしよう。

第6話くアリスの願いく

六年生になってから初めての冬が訪れた。

これだけだと大抵、夏はどうした秋はどうしたチルドとの関係はどうなった、アリスが好きなのはチルドか俺かどっちか、または俺達以外の第三者かなどと疑問に思うことだろう。こんな質問に答えるほど俺はいちいち暇じゃないんだが、おまけとして話しておくことにしよう。

春のあの日の翌日、俺はチルドと一緒に下校しないかと誘うと、あっさりと承諾してくれた。下校中は特に会話とかすることもなかったが、あいつは自分の歩く道に変化が起けると、すぐに立ち止まってその場をじっくり眺めたりする。大抵、鳥が飛び立っただけの季節が変わって花の色が変わっただけのそんなものだが、よく見ないとわからない部分もあった。

それを真っ先に見つけることのできるこいつはほんとにすごいと思った。一度、そのことを話したら「僕よりも多分カズのほうが詳しい」と言われた。謙遜して言ったのだと思ったのだが、よく考えてみれば俺が小学校に入ったばかりの頃にこいつはいなかった。

確かアリスもいなかったと思う。こいつらが来たのは割と最近——と言っても二年位前だったはずだが——だった。アリスのことはよく周囲から聞いていたが、チルドのことを知ったのは今年が初めてだった。

俺とチルドは友達となり、たまに猫と戯れ、チルドは俺達がいるときに限り、たまにドッジボールをしにやってくる。そのこともあってか、チルドも次第にクラスの中に溶け込んでいき、少しは喋るようになっていた。それでもまだ人を避けている面は目立つけど、それでもいいんだ。チルドがクラスの中に溶け込むようになること、

それこそがアリスの願いだったのだから。

第7話　突然のお使い

近況報告も済んだところでそろそろ話を冬に戻すかな。

この地方は結構冷え込みがきつく、冬になると風は極端に強くなる。毎年クラスで風邪をひく奴が続出する。現に去年、俺がいたクラスなんかはクラス全体の半分が風邪でダウンしていたため学級閉鎖になるほどだった。そして、うちのクラスでもぼちぼちその傾向が現れ始めていた。

その最初の標的がチルドだった。

担任の先生が出席簿とチルドの席を二、三回確認したが、本来チルドが座っているべき席は空席となっていた。

「今日はお休みね」

先生が機械的にチルドの欄に正の字の一边を書き加える。一時間目が終わり、アリスが俺の元にやってきた。

「チルド君、今日はお休みみたいだね」

アリスは心底心配そうな顔をしながらつぶやいた。

「みたいだな。あいつが風邪をひくなんて珍しいな」

チルドは弱そうに見えて実は結構体は丈夫なんだよな。そのチルドが風邪を引くということは今年の風はよほどたちが悪いんだろう。「あんまりしょぼくれるてるなよ。今日はあいつの代わりに猫達のところ行ってやろうぜ」

「そうだね」

アリスはやはり元気なさそうに頷いた。

そうそう、さっきの答えだが、それはどうやらチルドである俺は睨んでいる。今回もそうだが、アリスはチルドに何かあるたびに、やたらとあいつのことを心配する傾向がある。その時ばかりはいつものあの元気な笑顔がどんよりとした感じになってしまい、端から

見ればまるで別人のようだからだ。それほどまでにチルドを心配しているとなれば、もうこれは決定だろう。本人に聞いて確かめたわけではないがおそらくこの路線で間違いない。言え本人は絶対否定するだろうからな。

その時いつも慰めるのは俺の役目だった。アリスとも、あの一件以来すっかり仲良くなっていたし、彼女のほうもよく俺を頼ってくれるし、俺もよく彼女には助けられていた。所謂持ちつ持たれつの仲なわけだ。

アリスの元気がない一日が終わり、帰り支度をしていると担任の先生が俺の元に歩み寄ってきた。

「渡辺君、確かチルド君と一番仲が良かったのはあなたよね。今日授業でやったところのノートとみんなの寄せ書きを彼の家に届けてあげてくれないかしら？」

「わかりました」

俺は断る理由などなかったので素直に頷くと、授業のノートと寄せ書きをかばんの中に詰め込み、教室を出た。アリスを誘おうかと思っていたのだが、彼女の姿は既に教室の中になかったし一人で行くことにした。先に見舞いにでも行っているのかとも思ったが、そう言えば彼女はチルドの家を知らない。

「他の用事かな…」

アリスのことを気にかけて、俺も教室を後にした。

第8話　迷いの森

そういえば、俺もあいつのうちまでの道のりは知らない。あいつと帰る時はいつも分かれ道で別れることにしているからだ。だからその先までついていったことはないし、ましてやチルドの住まいを見たことはなかった。

「……………」

俺は一瞬無事に奴の家にとどり着けるか不安になったが、今さら男がこんなところで退けるはずはなかった。どうせ町の中なら、夜になってもたいして怖くなしな。

俺は学校を出ると、真っ直ぐいつもの帰り道を歩いた。チルドがいる時もあまり話はしないのだが、やはり一人だとどこか心寂しいものがある。しかも冬だから夕暮れの訪れが夏に比べると一時間以上も早かった。

分かれ道にとどり着いた。

チルドがいつも通っていくのは右の道。右の道は当時迷いの森と噂されていた森で、少し町の外からはみ出しているらしい。夕暮れのオレンジ色の太陽が、森をさえあに不気味な色に照らしている。

「えーい、何をいまさらビビッていやがる！」

俺は自分の顔を叩き、森に向かって歩き出す。足音に反応したのか、カラスが一斉上空に飛び上がり、俺のど肝を抜いた。

「く、くそお馬鹿カラスが驚かせやがって…」

強がって言う俺の声は震えていた。やはりこの場所だけはあまり一人では来たくなかったんだよな。

気がついたら俺は弱音を吐いていた。ハッとなりもう一度渴を入れるために自分の顔をさっきより強めに叩く。

「いくぞ……………」

ああ、駄目だ。やはり声が震える。

体は正直とはよく言ったものだ。

俺は気がついたら普通の歩きから早足に、気がついたら走っていた。

この迷いの森は昼間、太陽が差していてもやたら高い木のせい、ほとんどその光は遮られてしまう。

くそ、こんな森の中に住むなんてチルドの奴は意外に意地悪なのか。

急にチルドが憎らしく見えた。

いや、今はチルドを憎んでいる場合じゃない。それにあいつだって好き好んでこんなところに住むはずはない。きっと、両親が家を買いお金がなくて、やむなく家賃の安い（多分）この森の奥に住んでいるのだろう。

チルドも災難だよな。でもきっと、あの性格だから「慣れれば平気」とか言うんだろうな。

畜生、チルドの無関心さが今は少し欲しいぜ。

俺は一直線に森を突っ走った。早く森を抜けてくれ。

チルドの家よ、早く見えてくれ。俺は走りながら必死に祈った。

第9話　光の羽

「はぁ、はぁ、はぁ……」

森に入ってからどのくらい時間が経過しただろうか。ずっと森の出口を目指しているはずなのに、森の出口はもとよりチルドの家らしきものも全く見えてこなかった。

俺は次第に怖くなった。頭の中で必死に落ち着けと叫ぶが、恐怖は冷めることはなく不安ばかりが厚い固まりとなって俺の頭に落ちてくる。

「あ……」

俺の目から一粒の涙が落ちた。

畜生、怖すぎて涙が出てきちゃった。しかし、泣いていたって始まらない。俺は自分を落ち着かせながら、周囲に気を配りつつ森を歩いた。暗くてほとんど何も見えなかったが、これは逆にチャンスでもあった。もし、この先に家があるのなら電灯か何かが灯っているはずだ。つまり、明かりが見える方向目指して進めばそこがチルドの家だという計算になる。俺は光を探しながら森を歩いた。しかし、この時の俺は今自分がいる場所が迷いの森であることをすっかり忘れていた。

そう、この森は迷いの森。入った者を容赦なく迷わせる魔法の森だったんだ。

そんな中で家の電灯を探すのはなんと愚かなことだっただろう。何時間歩いても電灯の光は見つからず、しまいに俺は体力尽きて木の幹に座り込んでしまった。

「俺、このまま死ぬのかなぁ……」

はるか真上に見える星空を見上げながら、俺はそんなことをつぶやいた。体力は尽き果てた。食料になるものは何もない。もう歩く

力さえも出なかった。かばんの重さでさえおっくうなほどだった。その時だった。生と死の狭間を彷徨う俺につぶやきかけるような小さな声が聞こえた。

「この森の出たいのなら私の光を追いなさい…」

「え？」

俺はかすんだ瞳で真上を見上げた。真上に見えたのは満天の星空ではなく――

「光る……羽？」

見えたのは白銀に光る二枚の羽だった。

「さあ、ついていらっしゃい」

声は優しくそう言っていると、森の先に向かって飛行を始めた。

「あ、待って……」

俺はぼろぼろの体を引きずりながらひたすら光る羽を追った。するとどうだろう、真っ直ぐにしか進んでいないはずなのに、俺はいつの間にか森を抜けていた。そして、目の前には小さな明かりが灯っている一軒の家。

「チルドの……家？」

俺は思わず地面にへなへたと座り込み、泣き崩れた。しかし、これから起きる出来事のほうがもっと凄まじく、泣くことも忘れるくらいだったことを、今の俺はまだ知る由もなかった。

第10話〈空っぽの家〉

ひとしきり泣いた俺は、ぼろぼろになった体でチルドの家の前までやってきた。今日はもうこいつの家に泊まらせてもらおう。ここまで苦勞して授業のノートと寄せ書きを持ってきたんだからそれくらいしてもらって当然である。

と、ここで気づいたことが一つ。

「チャイムがない？」

迷いの森を出てホッと一息の俺に再び起こる珍妙な出来事。

俺はしばらく口を閉じることができなかった。

「いや、チャイムがないのならドアをノックすればいいだけのことさ」

俺は氣を取り直してチルドの家の扉を軽く二回ノックする。

反応がなかったのでもう一回ドアをノックするが、やはり反応がない。

チルドの奴もう寝ちゃったのかな。それにしても明かりがついているし、第一奴の親は家にいるはずだ。

いつまで経っても反応がないことに先ほどの怒りが湧き起り、俺はわけのわからないことを叫びながらドアを蹴破った。ドアはみしみしみしとすごい音を立てて家の内側に倒れるが、そんなことは知ったことか。今の俺はそんな冗談を受けられるほどの体力と精神力は残っていないんだ。

俺はわずかとチルドの家の中に入る、が――

「誰もいない？」

いや、それだけではない。どの家庭に、普通はあるだろう、ベッドや机、テーブル、そういった家具用品すら、この家には一切置かれていなかった。

「ど、どうなっているんだ？」

迷いの森で起きた目眩がまた俺を襲い始める。

今日は一体どうなっているんだ。

俺は幻でも見ているのか。はたまたこれは俺の夢で、まだ夢から覚めていないのかもしれない。だとしたら早く起きろー！今日だって学校はあるんだぞー。

俺はまた、頬をきつく叩いた。しかし、残るのは痛みだけ。俺の予想ではここで目が覚めて朝になっていて、学校に行ったらチルドはちゃんと学校に来ているはずなんだ。それなのに…。

「これはなんなんだよー！！」

俺は力の限り叫んだ。溜まりに溜まったストレスと、行き場のない恐怖を発散させるために。

「はぁ、はぁ、はぁ……」

これで少し、また落ち着いたな。

俺はチルドの家をくまなく探索してみることにした。何かチルドの備品一つくらい残っているなら後を追える。また迷いの森に入らなければいけないのは正直嫌なのだが。しかし、これがまた見事に何もなく、本当にチルドはここに住んでいるのかということすら危うくなってきた。

「もしかして住所を偽って住んでいるとか……」

俺の中にまた、しょうもない憎しみが浮かび上がった。

こんなことを考えたってしょうがないというのに。

第11話〈RPG's Castle〉

「うっ」

俺は部屋の中から感じる異様な寒気を感じ取った。家の中に入っただときからずっと思っていたのだが、この部屋は俺が蹴破った扉以外にも風の通り道があるようだ。

「ここか……」

ちょうどドアの向かい側にそれはあった。そこから風に加えて……。

「音が聞こえる」

風の音とはどこか違う音が聞こえた。

普通の家ならばこの壁の向こう側は外である。しかし、この壁の奥からは風の音だけではなく、なにやら変な音も聞こえる。正直、これ以上おかしい目に遭いたくはなかったが、ここまできて何の報酬もなしに帰ることはできなかった。

「もし隠し扉か何かなら……」

この家のどこかに、というかこの壁の近くにスイッチか何かがあるはず。

俺は手探りで隙間風が吹く壁を調べた。調べていくうちに俺の手が何かに触れ、壁が開いた。本来外に出るべきはずの壁の外側にはまるでお城のような雰囲気のある廊下がずっと続いていた。

「こりゃまたたいそうな趣味だな……」

どこの城だよ、ここは……。

まったく、チルドは本当に突っ込みどころの多い奴である。軽くRPGが入っているよ。廊下を歩きながら、俺は周りをきょろきょろと見渡す。廊下の壁の両側には均等にろうそくが立っていて、この妙な明るさが逆に不気味さを強調させた。このまま行ったらいきなり魔王とかと戦うことになりそうな気がする。いや、確かその前に魔王を守る右腕みたいなものを倒さなくてはいけないはずだ。敵

(?)の本拠地だというのにずいぶんと妄想が膨らむ。しかし、この場所がそういう仕様になっているのだからそれはしょうがない話だ。

「しかし、この廊下いつまで続くんだ？」

もう何百メートルかは歩いているはずなのに、いつまで経っても別れ道一つ見えてこない。

お城ってこんな一直線なものだったっけ？もうちょっと優雅でこう、迷路みたいな感じがしてただけどなあ。しかし、俺はふと立ち止まって考えた。

「……」

迷路といえば、ついさっきまで迷いの森で散々迷ったばかりである。

「どうせ仕掛けがあるんなら迷路以外にして欲しいかも……」

俺はぼそとつぶやいた。つぶやいたところで誰も聞いていないのだが。

それにしてもこの変な城に入ってから風の音も変な音もしなくなっただけ。聞き間違いってことはないと思うが、こうも不自然に消えられるとなんだか不安な気持ちになる。

廊下がずっと一直線なのも気になる。また迷路だったりしたら今度こそお手上げだ。

迷いの森での不安が俺の鼻に募ってきた。しかし、そんな俺の鼻に、そのことを忘れさせるくらい美味しいそうな匂いが入ってきた。そういえば晩御飯はまだ食べていない。どうせチルドの家でご馳走になるんだったら、ここで食べたっていいよな。ここはチルドの家なわけだし。

俺は勝手な理由をつけ、匂いのする方向に向かって歩いた。匂いの漂う方向は途中で右に曲がり、どうやらこの城の廊下は迷路じゃなかったことの証明もできた。これで張りきって美味しそうな匂いに集中できる。

俺は必死に鼻を聞かせ、匂いの元を追った。しばらくすると、俺

の前を歩く人影のようなものを見つけた。

どうやらあいつらが匂いの元らしいけど、まさかあいつら自体が食べ物、なわけはないよな。いくらお腹がすいて思考が鈍っているからってそれはない。

俺はこっそりと二人の姿が肉眼で見えるくらいの距離まで近寄った。しかし、その二人は人間ではなかった。おでこの辺りに角が生えていて、体の色はどす黒い。なんとも不格好な生き物だった。しかも何か話している。

「アリス様が久々に来てくれはったんは嬉しいけど、まさかあんなことになるなんてなあ」

一人が言った。

「しゃあないやろ。普段は大人しい人やけど、ああなつてまうともはや止められるんはチルド様だけや」

なんだこいつら。

アリスとチルドって、もしかしなくてもあいつらのことだよな。

俺はもう少しこいつらの話を盗み聞きしてみることにした。

「せやけど、チルド様もこりひんなあ。わしには人間の女子の良さがいまひとつわからん」

一人がため息をつきながら言うともう一人も同感と言わんばかりに頷いた。

「わしもや。チルド様は人間の雑誌をかうてきてはこの女子はええ、あの女子はええ。挙句の果てには、チルド様が子供の姿の時に通つとる小学校の女子までええなんて言い出しよったで」

「仮にわしらに人間の女子の良さがわかつとったとしてもいくらなんでもあれはないわ…」

「そやな。まずないわ…」

その後、二人は少し間を置いて揃えてこう言った。「ロリコンや」と。

その言葉に俺はとうとう吹き出してしまった。

それがやばいと気づいたのは角人間達に槍を突きつけられてからだ。しかし、角人間達は槍を突き出したまま、俺の姿や顔を凝視しているだけだった。

第12話〈心優しき悪魔のしもべ〉

「なあ、こいつもしかしてチルド様が言うとった…」

角人間の一人が確認するようにつぶやくと、もう一人も「ああ」と頷いた。

「お前、チルド様と同じクラスもんの者か？」

角人間の一人が聞いてきたが、俺の口からは嗚咽しか出てこなかった。角人間は俺の目線の先に気がついたのか、二人とも槍をしまいこんだ。

「これで少しはちゃんと喋れるやろ？」

「もう怖くないからおいちゃん達の質問に答えてくれんか？」

角人間達は優しく笑い——それでも俺からすればまだかなり怖いものがあるが——質問の答えを促した。

俺は口では答えず小さく頷いた。

「やっぱりそうか。実はな、わしらはチルド様の召使いをやっとる者やねん」

「チルド様から君のことはよう聞いとるで。『俺と友達になろうとした奇特な奴』や言うてな」

角人間達は愉快そうに笑った。

「本来魔界の者は人間を支配、奴隷化するんが普通なんやけど、君を見ていると友達言うんもまんざらでもなさそうな気がしてきた」

「そうやなあ。もう、魔王や悪魔が世界を支配する時代やないんかもしれんな」

角人間達が生みじみと話している横で俺の腹が突然大きくなった。急に安心したのかおなかも再び元気を取り戻したようだ。

「ハッハッハ、元気のいい証拠やな」

「まったくや。坊主、腹減ったんのか？」

角人間の質問に俺は小さな声で「少し……」と答えた。

「ハッハッハ、何を言うてんねん。さっきの腹のなり具合はちよっ

とどころやなかったで」

「迷いの森を自力で抜けてくるくらいや。そりゃあさぞかし腹も減るはずや」

角人間達は優しく笑いながら「こっちにおいで」と言った。

案内された場所はこの城の台所のようなところ。意外にも悪魔達の台所は人間の暮らすものときほど変わりがなかった。むしろ、人間の使っているものよりも良さそうな調理器具がいっぱい置いてあった。

角人間達はカートの中に入っていた料理をテーブルの上に置くと、俺に食べるように勧めた。

「……」

確かにいい匂いはするし、ここに並べられている料理も人間の食べるものとはほぼ同じみたいだ。

しかし、しかしだ。こいつらは悪魔だ。いくらでも俺を騙すことはできるはず。そう思うと、いくらおながが減っているとは食べるのに抵抗を覚えてしまう。それを察したのか、角人間達は少し怒ったような顔で言った。

「食べたくなかったら食べんでもええで」

「そやけど、これをそのまま捨てるんはもったいないなあ。魔界の魔王様に食べ物を粗末にした罰で死刑にされたらどうしよう……」

「そ、そんな大袈裟な。食べ物くらいで死刑だなんて」

俺の言葉に、角人間達はものすごい形相で俺に詰め寄ってきた。

「ど阿呆！魔界の法律は人間の世界とちゃうねんで！」

「そうやそうや。人間の世界では許されることが魔界ではほとんどあかんねん。食べ物のこともそのいい例や」

角人間達は右往左往しながら揃って「魔王様に殺される」などと騒いでいる。

うーん、こいつら決して悪い奴らじゃないみたいだし、一応助けて

くれたし…。

俺は角人間達の用意してくれたご馳走を凝視する。そして、一口だけ口に入れた。

「美味しい…」

俺が最初に食べたのはステーキだったが、肉の厚みも柔らかさも焼き加減も全てが揃って最高級の味だった。

「どや、美味しいやろ？」

「うん！」

大きく頷くと、角人間達は嬉しそうに俺に次々と料理を勧めてくれた。しかし、半分くらいまで食べた時点でふと気がついた。

「これって本当は誰かが食べる予定のものじゃなかったの？」

だからああやってわざわざカートで運んだりしていたのだろう。

角人間達は気まずい表情になりながら「そうなんやけど…」とつぶやいた。あまり聞かなかったほうがいい話題だったな。

「ごめんなさい」

俺はすぐに謝った。角人間達はそんな俺の頭を軽く叩いた。

「坊主が謝るようなことは何もないて。そんなことを気にしながら飯を食うても消化が悪なるだけや。飯は楽しく食わんとな」

角人間達はそう言って、にかつと笑った。

第13話 魔王の部屋？」

食事を一通り食べ終わり俺は本来の目的をまだ果たしていないことを思い出した。

「おじさん、チルドはこの城にいるんでしょ？」

「そうや」

角人間は洗い物をしながら答えた。

「じゃあ、後で俺をチルドのところに連れていってくれない？」

俺のその言葉に角人間達の動きが止まった。

背中を向けているため表情は見取れなかったが、おそらく恐怖に歪んでいる。ゆっくりとこちらに向き直り、カタカタと震えながら首を横に振った。

「チルド様に用があるんやったらわしらが取り次ごう。何の用や？」

「いやさ、チルド風邪で今日学校を休んだからさ、今日の分の授業のノートと寄せ書きを持ってきたんだ。早く元気になるようにって」

「そ、そらきつと喜びはるわ。ほならわしが……」

と言って寄せ書きを取ろうとする角人間の手を俺は軽くはたいた。

「苦労してここまで来たんだ。チルドの顔を見て思いつきり文句の一つも言ってやらなきゃ気がすまないよ。だからこれは俺が渡す。」

おじさん達はチルドのいるところに案内してくれればいい」

「今それができりや苦労は……」

角人間の一人が泣きそうな顔で言おうとするのをもう一人が無理矢理押さえ込んだ。

「わかった、連れていったるわ。ただし、少々機嫌が悪いかも知れんよって、あまり変なことと言わんといてな」

「あ、うん。わかったよ……」

ほんとはあいつの目の前で大激怒してやりたかったのだが、そういう理由なら仕方ない。多少その辺りは緩めることにしよう。というか、あいつでも機嫌が悪い時があるんだな。

角人間達に連れられ、俺はチルドの部屋に案内された……のだが。
「これって、部屋……なの？」

どう見ても子供部屋にしては大きな扉だ。取っ手はなぜか低めの位置と高めの位置につけられている。二つつける意味なんてあるんだろうか。

「ほなら坊主、後は一人で行けるな」

角人間達はそう言うのと、俺が頷くのより先に、その場を全力ダッシュで立ち去っていった。

一体何を怯えているんだろう。風邪や病気になることで性格が豹変したりするのかな。チルドならそれもチルドありえそうな話だ。

俺は重い扉の取っ手を両手で掴み、力いっぱい押した。

鈍い音を出しながら、扉はゆっくりと開いていく。扉の隙間からはベッドも見えたし、ここがチルドの部屋であることには変わりなさそうだ。俺はようやく安心し、部屋の中に一気に押し入った。

「やい、チルド。おまえ、よくも……」

そこまで言っただけ俺の思考がまた止まる。なぜなら、そこにチルドはおらず、代わりに変な大人二人が壮絶な戦いを繰り広げていたからだ。しかも戦っているうちの一方は、迷いの森で俺を助けてくれたあの光の翼だった。何か喚きながら戦っているみたいだけど、そのせいでなんだか辺りの破壊度合いが急激に進んでいるような気がする。

いったいこれはどういうことなんだよお。

あのおじさん二人は俺に嘘の場所を案内したのか？ いや、でもそんな風には見えなかった。しかし、様子がおかしかったのは事実だ。ということはやっぱり謀ったな。そうならばこの部屋に用はない。俺は戦っている二人に気づかれないようにこっそりと部屋を出ることにした。

くそお、こっちが子供だからって下手に出やがって！

「ん？」

部屋を出ようとするとか何か痛々しい視線が背中に突き刺さるような感じがした。後ろをちらりと振り返ってみると、なんとびっくり。二人は戦いの手を止め、俺のほうをじっと見やっているではないか。まさか、やばい、気づかれた？

俺は自分の顔から血がひいていくのがわかった。

第14話〈チルドと二人の召使い〉

時は半日ほど遡る。

朝起きるとどうにも体がだるかった。

「アンド！ロイド！」

チルドはこの城を切り盛りしている二人の召使いを大声で呼んだ。十秒も立たないうちに部屋の扉がゆっくりと開き、外からインプが現れた。

「なんぞ御呼びでしょうか？」

「……………」

召使い二人の問いにチルドは答えなかった。

「「チルド様？」」

二人の召使いは怪訝そうにベッドの上に座っているチルドを見上げる。しかし、チルドは依然無表情のままである。

「通学の用意ならできてまっせ？」

「朝食なら既に用意してまっせ？」

二人の召使いがいろいろと質問してくるが、チルドは満足そうな顔をしなかった。

「……………がない」

チルドはかすれた声でようやくそう言ったが、召使い二人組にはまるで聞こえなかった。

「チルド様…？」

「今、何か仰いましたか？」

二人の召使いは脳天気になんかことを聞いてくる。

「だから……………」

チルドはわなわなと拳を振るわせながらつぶやいた。

「声が出ないと言ったんだよ、このすつとこどっこい！！」

チルドはそう叫んでから勢いよく咳き込んだ。

この部屋を破壊するかのような怒声に二人の召使いは「左様でございますか」と目を回しながら言った。

「昨日まではちゃんと声が出たのに、なぜ今日になって声がまったくでないのだ。それに、なんだか体もだりいし、一体こりゃなんなんだあ？もしかして天使の奴らの呪いにでもかかったか？」

チルドはかすれた声で苦しそうにそう言っていると、舌打ちをしてだるそうにベッドの上に寝転んだ。

「チルド様、その症状はおそらく天使の呪いなどではなく、風邪やと思います」

「カゼ？なんだそれは？室内に風なんか吹くわけねえだろうが」
体全体がだるいせいか、チルドの声はかなり苛立っている。

「ちやいますよ、チルド様。風の邪と書いて風邪と読みますねん」
「つまり何か？俺は昨日のうちにその風邪とかいう邪悪に呪われたってわけかよ？」

これまた脳天気の説明する召使い達を目ざとく思いながら、チルドは自分なりにまとめた簡単な結論を述べた。だいぶずれているような気はしたが、今のチルドに何を言っても無駄だとわかっていたので、召使いの二人は「左様でございます」と声を揃えて言った。

「安心してください。風邪はちゃんと安静にしたら二、三日で治る小さな病です。その間はくれぐれもアリス様とご喧嘩なさらぬことですな」

「だ、誰があんな奴と喧嘩などするかよ。だいたい天使とは言え女相手に本気で喧嘩をするわけねえだろ」

「チルド様、そない言うてますけど、この間の被害は覚えてらっしゃいますな？」

アンドの指摘にチルドは言葉を詰まらせた。

「まあそれはともかく」とロイドが話を戻す。

「今日はゆっくりとお休みください。アンドも言うてましたとおり、風邪いうんは安静にしとればしとるほど早う治ります。そやから今日はゆっくり寝て、ばっちり栄養を取ってください。むしろも全力でチルド様が回復するような美味しい食事を作りますさかい」

チルドは不服そうに舌打ちをすると、何も言わずにベッドの上に寝転がった。

その様子を不安そうに見守りながら二人の召使いは部屋を出た。

「しかし、なんや、チルド様がまさか風邪を引くとは思わなかったなあ？」

仕事場に戻る途中、ロイドはアンドにささやいた。アンドも「まったくや」と同意を示した。

「少し前から魔王様の意向で人間界にきて、チルド様の面倒を見るとるけど、まさか人間のかかる病気にかかるとは夢にも思わなんだ」
「せやけど無理はないて。普段は人間達の目を欺くために奴らと同じ格好をしとるよってな」

「ふゝむ、そんなもんかのお」

「そんなもんやて。しかし、人間界の病も怖いのお。普段あんだだけ暴力的でやかましいお人がぴたっと静かになるやなんて」

「こら、滅多なこと言うたらあかん。あん人に聞かれたらどないするんや」

「そやな。それにしても、あれでまだ軽いほうなんやろ。人間の病て」

「そうらしい。あれ以上に重い病気があるなんてわしは信じられへんわ」

アンドとロイドはそんな話をしながらチルドのためにおかゆを作ることにした

第15話〈安らぎの面会者〉

「アンドさん、ロイドさん、いらっしゃいますか？」
いつもだったらチルドがにぎやかに帰宅するころ、城に来客が訪れた。

「これはこれはアリス様、ようこそいらっしゃいました」
「学校はどないしたんですか？」

「もう終業時間ですよ」

アリスは壁掛け時計を指差しながら言った。

「ほんまや。もうこんな時間や」

「いつもはチルド様がやかましく帰ってくるからな」
アンドとロイドは愉快そうに笑った。

「もしかして、アリス様はチルド様の…」

「はい。大丈夫かなと思って。何か悪い病気なんですか？」

「いや、ちょっとした風邪ですわ」

「風？」

やはりアリスも同じように首を傾げたので、アンドとロイドはチルドにしたのと同じような感じで説明をしてやった。

「そうでしたか。人間界には怖い病気があるのですね。普段あれだけ元気な人をそんなにってしまうなんて」

アリスは大層驚いた表情をしていた。

「わしらもびっくりですわ。普段は寝起きが悪うて、いつも起こしに行ったら殴るわ蹴るわ暴れるわ……」

「そやけど、今日はそれがぴたっと止みましてん。それどころか、わしらがチルド様の部屋に行く前にあの人が自分でわしらを呼んだんです」

「まあ、それはすごいですね」

アリスは手を口にあてる仕草をしながら仰天していた。

「それで、今チルド君は……」

「おとなしゅう寝ておられればええんですけど、多分寝ておられんでしょう」

どこか諦めた表情でつぶやくアンドとロイドにアリスは苦笑するしかなかった。

「とりあえず、面会はしても大丈夫なのですね」

「相当暇をしておられるはずですから、お話の相手でもしてやってください」

「ありがとうございます」

アリスは優しい笑顔でにっこりと微笑むとその白い綺麗な羽で飛び上がり厨房を去っていった。

「あん人はほんまにええ人やなあ」

「ああ、わしら悪魔でも、あん人の笑顔にはどこか安らぎを感じるわあ」

去っていくアリスの背中に見とれながらアンドとロイドはそんなことをつぶやいた。

第16話 イチゴとエロ本

「チルド君、いる……?」

アリスはチルドの部屋の前まで来ると控えめなノックをしてからそっと部屋の中に入ると、広い部屋のどこかにいるチルドを探した。「いた…」

ベッドに寝転がっているチルドの姿を見つけると、アリスはそこまで飛んでいった。

「チルド君」

「おわあ、アリスウ!?!」

チルドは読んでいた雑誌を慌てて枕の下に突っ込んだ。幸いアリスには気づかれていないようだ。

「そんなに驚かなくても……」

アリスの顔が悲しみにくれていく。チルドはアリスの性格を知っているためかすぐに「悪かった」と反省の色を示した。

「今日は何の用だ?」

「チルド君、風邪をひいたって聞いたからお見舞いに来たのよ。ほら、チルド君の大好きな苺も持ってきたから」

「苺の匂は今じゃねえ」

刹那、二人の間に冷たい風が流れた。そして、たちまちアリスの表情が悲しみになり、その美しい瞳から涙がこぼれそうになる。

「ああ、俺が悪かったよ!ほんとにすみません!ありがとうございますいただきます!」

チルドはそう言ってアリスから苺の入った袋をひったくると、一粒つまんで口に放り込んだ。

「うむ、少々酸っぱいが、これはこれで美味しいな」

アリスを泣かさないうようにするためのお世辞ではなく、素直にそう思った。

「ほれ、アリスも食ってみ？」

「う、うん……」

アリスは小さな指で涙を拭くと、チルドから苺の入った袋を受け取り、中の苺を一粒口の中にいれる。

「美味しい……」

やっとアリスの顔に笑顔が訪れた。

これで一安心——のはずだったのだが。

「チルド君、この本はもしかして……」

アリスの視線がふとベッドの横に置いてある本棚の上に落ちる。

「げ、それは……」

しまったと言わんばかりにチルドの顔が恐怖に歪んだ。本棚に置いてあるのは既に読み終わったエロ本だった。そう言えばそんなところにも置いたような、とチルドの短い回想劇が始まる。

「チルド君、またこんなものを読んで……」

アリスは怒気を含んだ声で言った。

「許さない……」

これはヤバイな。

チルドは今のうちにベッドの下に隠してある剣に手を伸ばす。

ガギン！！

それはほんとに一瞬の出来事だった。アリスの手にもいつの間にか剣が握られており、二つの剣が今ひしめきあっていた。

「チッ！」

アリスは舌打ちをすると、身を引きチルドと距離をとった。

「ま、待てアリス！悪気はなかったんだ。ちよつと間が指してだな…」

「チルド君、それ言うの何度めなのよ…」

アリスの目は文字通り釣りあがっていた。いつものように来るかと思いきや、アリスは大人しく剣を虚空に消し去った。

「もうすぐカズ君が来ると思うから、今日は勘弁してあげる」

「ふえ？」

チルドは安心したと同時に疑問に感じた。

「カズの奴、ここに何をしに来るんだ？そもそも迷いの森を抜けないといけないからきつと来れないと思うぞ」

「だから私が行くんじゃない。町に薬を買いに行くついでにね」なるほど、そういうことか。

チルドは気が緩んだのかだらしなく肩を落とした。

「チルド君、その本はちゃんと閉まっておいてね。子供のカズ君にそんなものを見せるわけには行かないでしょ」

先ほどまでのおどおどした口調とは違い、アリスは命令するようにそう告げると部屋を去っていった。

誰もいない部屋の中でチルドはため息をつきながら「怖え」とつぶやきながら再びエロ本を読むのに没頭した。

第17話〈戦争再発〉

二時間ほどしてアリスがチルドの部屋に帰ってきた。

「カズ君、やっぱり迷っていたわ。ちゃんと道標になってきたから迷うことはないと思うけど……」

アリスの言葉がそこで途切れる。向こうのベッドではうつぶせになって本を読んでいるチルド。彼がうつ伏せで読んでいるときはたいてい……。

アリスはチルドに気づかれないように気配を消してベッドまで近づいた。そして、ベッドにたどり着いた瞬間――

ズドォー!!

ものすごい音と共にベッドが二つに割れた。

「チッ!」

アリスは舌打ちをして、床にへたりこんでいるチルドを睨みつけた。あれほど片付けておけと言ったのに、この男は。

「お……お早いお帰りで……」

チルドの顔はかなり引きつっていた。

「で、カズはこっちに向かってきているのか?」

「ええ、向かってきているわよ。でも、しばらく時間はかかるでしょうから……」

アリスはそう言って剣を振り上げる。

「チルド君のバカー!!」

「うおお! アリス、落ち着けえ!」

チルドも剣を手にとって対抗するが、アリスの暴走は一行に止まなかった。

「チルド様、夕食をお持ち致しましたで」

「今日はアリス様もおられることやし、めっちゃ奮発しましたさかい。たくさん召しあがって下さい」

アンドとロイドは自慢気に引いてきたカートの中身を見せるが、当の本人達は彼らが部屋に入ってきたことさえ気づかなかった。

「こりゃあまた派手にやっとなるなあ…」

ロイドが呆れたように床下に放ってあったエロ本を取り出した。

「こんなもんを読むチルド様もチルド様やけど、アリス様もええ年齢なんやし、こういうのにも寛大になってもらわんと。なあ？」

「確か天界は一夫多妻制やて聞いたけど、ちゃうかったんかな？」

「世の中には例外もおるっちゅうことやろ。アンド、巻き添えを食わんうちに帰るで」

「飯はどないするねん？」

「捨てるんはもったいないし、わしらと子供のチルド様がつれてきはった猫共とで食べるとうしよう」

こうして二人の召使いは何事もなかったかのように部屋を立ち去っていった。それから数時間後……チルドとアリスはカズと再開することになる

第18話「アリス」と「チルド」

「う、うわあああ！か、カズうー！？」

黒い羽に二本の角がある人間が突然取り乱したように叫びだす。

「ど、ど、ど、どお……！！」

ど、ど、ど、ど？

「どどど、どうしようアリス！ば、ば、ば、ばばれちまったぞ！
なんだか半分以上声になっていない。

「あら、カズ君。ずいぶん早く来たのね。よく一人でこのお城を攻略できたね」

黒い羽に対して俺を助けてくれた白い羽の女性はとても落ち着いた雰囲気と優しい笑顔で俺を迎えてくれた。

「ば、馬鹿野郎！悠長なことを言っている場合かよ！俺達悪魔と天使は無闇に人間に正体を明かしちゃいけないって言われていただろ！」

「それはそうだけど、いいじゃない。私、カズ君なら信頼できるもの」

白い天使は膨れっ面をしながら言った。

「それは何か。俺に対してあてつけか？」

黒い羽がムスツとした顔で言った。

「だって、カズ君なら大人になっても絶対あんなもの読まないし、絶対に浮気なんてしないと思うもん」

光の羽を持つ女性は頬を膨らませてそっぽを向いた。

「そのくらい別にいいじゃねえかよ。浮気は男のロマンなんだぜ？
なあ、カズもそう思うよな」

「は、はあ……」

俺はこのなんとも言えない大人の会話についていけなかった。ま

だ十二歳の俺にはエロ本とか浮気とかは早すぎるよ。それにこの二人、名前こそ“アリス”と“チルド”だけど俺の知っている彼らとは似ても似つかなかった。

「んあ？どうしたカズ？」

俺の考えなどまるで察していないのか“チルド”が怪訝そうに俺を見下ろした。

「チルド君、多分この姿じゃわからないわよ。いったん子供の姿に戻りましょう」

“アリス”はそう言うと、太陽をモチーフにした首飾りの上に手を重ねた。刹那“アリス”の体はみるみる縮んでいき、俺の知っているアリスの姿になった。

「アリス…？」

「やっほー！」

混乱している俺の前でアリスは元気よく右手をあげて見せた。

「ほらあ、早くチルド君も戻りなさいよ」

「わあーったから焦るなって」

“チルド”は面倒くさそうに剣を構えて目をつぶった。すると、どうしたことだろう。俺よりはるかに背の高かった“チルド”は俺の知っているあのチルドの姿に戻っていった。

「……カズ、こんな時間に何か用？」

元に戻ったチルドはあいかわらず、どこか抜けたような話し方だった。

「あ……」

俺はあまりの出来事にすっかりここに来た目的を忘れていた。

ハハハ、もう何度目だ、目的を忘れたのは。

俺はかばんからクラスの寄せ書きと授業ノートを取り出すと、チルドに渡した。

「これ、今日の授業のノート。それからこれはクラスの皆からの寄せ書きだ」

チルドはクラスの皆が書いた寄せ書きを手に取ると、じつくりと

それを読んでいた。

「嬉しい…」

チルドは優しい笑顔でそうつぶやいた。

「カズ、アリスありがとう」

「うん！」

「ああ！」

俺とアリスは嬉しそうに頷いた。

「明日、クラスの皆にも、お礼言う」

「明日ってお前、風邪はもう大丈夫なのか？」

「たぶん平気。アリスと遊んでいっぱい汗をかいたから」

いや、普通あんなことしたらもっと体調悪くなるって。それよりも、さっきまでの戦いが遊んでいたというのはどう考えても抽象化しすぎな気がする。

「なあ、お前らは一体……むぐ!？」

「ねえねえ、今日はもう遅いからチルド君ちにお泊りしようよ!」

まるで何かから逃げるようにアリスは俺の口を塞ぎ、お泊り会を提案した。まあ、もともと今日はあんな目に遭ったから今夜はこいつの家に泊まらせてもらおうと思っていたけど、何でアリスまで？

「何よう。あたしが一緒じゃ嫌なの？」

アリスはぷうっと頬を膨らませた。

「いや、そういう意味じゃなくて…」

その先は恥ずかしくて言えなかったが、アリスにはわかったよう
で「ぜんぜん心配ナッシングだよ」と言って右手親指をぐっと立
てた。

本当にわかっているのかなあ。少し不安だった。

第19話 一日の終わりは二段ベッドで

「アンドー、ロイド」

チルドはやる気なさそうな声で二人の召使いを讀んだ。あのおじさん達の名前ってアンドとロイドっていうんだ。

……どこか安直な気がするの、は気のせい？

数分後、二人の召使いがチルドの部屋にやってきた。

「チルド様、何か御用でつか？」

「うん。カズとアリスとお泊り会する」

「左様でございますか。では、この部屋ではなんでしょうから客間を一つ空けましょう」

「ありがと、アンド、ロイド」

チルドが言うと、アンドとロイドは丁寧に頭を下げた。

「客間はいっぱいありますさかい、どこでも好きなところを使うてください」

「わしらはこの部屋を修理しときますんで」

「わかった。二人とも、行こう」

俺達はチルドに案内されながら適当な客間に入った。

「うわぁ、すげえ！これって二段ベッドって言うんだろ！」

俺達の世界では、二段ベッドは数百年も前に安定性や快適性が悪いということで販売中止になっているのだ。

「チルドってかなり金持ちの家だったんだな」

今の時代どこにもないこんなものを持っているんだ。当のチルドは「そうなの？」と首をかしげるだけだったが。

「カズ、迷いの森よく抜けてこれた。あそこ、普通の人間は絶対抜けてこられないはずだから」

それって言い換えれば俺が普通じゃないって事だよな。とはいえチルドに悪気はなさそうなので俺はとりあえず相槌を打った。

「迷ったときは本当に死ぬかと思ったよ。でも、変な光が俺を迷い

の森から出してくれたんだ」

「変な光？」

アリスが聞き返してきた。

「綺麗に光っていてさ。あの光を追っていったらいつの間にか森を出ていたんだ」

「光はどうなったの？」

アリスが興味心身になって聞く。俺は首を振って「わからない」と答えた。

「森を抜けたときにはもう光はどこにもなくてさ。でも、代わりにチルドの家の明かりが見えたんだ」

中がこんなになっているとは知らなかったがな。

「ふ〜ん……ふぁ〜」

アリスが小さなあくびをした。

「いろんなことがありすぎて今日は疲れちゃった。あたし、もう寝るよ」

アリスはそう言ってちゃっかり二段ベッドの上を取った。

「カズは、もう寝る？」

チルドが尋ねてきた。

「そうだな。俺も今日はもう寝るよ」

迷いの森であれだけ歩き、チルドの家に来てからも散々歩き、その後で美味しい料理をたらふく食べたら、もうとても眠かった。

「カズ、二段ベッドで寝ていいよ。予備のベッドを出して寝るから」
「それは悪いよ」

仮にもこの家の主なのに、客二人が二段ベッドを使うわけにはいかないだろう。しかし、チルドは優しく笑って俺に二段ベッドを勧めた。

お言葉に甘えて俺は初の二段ベッドをゆったりと体感した。散々な目に遭って、なんだかすごいものも見てしまったが、一日の終わりが二段ベッドなら文句はなかった。

第20話（一難去って）

チルドの家——というか城？——を訪れてから三日が経った。

チルドの風邪もようやく完全回復し、再び俺達クラスメートに元気な姿を見せ、相変わらずのマイペースぶりを披露してくれた。

チルドが風邪で休んだ日に起こった出来事は、二十年経った今でも夢に出るくらいよく覚えている。変わり果てたあの二人の姿を俺は決して忘れることはしなかった。というか忘れろと言うほうが不可能だ。

チルドも学校に復帰してきたことだし、アリスも呼んでそれとなく聞いてみるか？でもなんか秘密にして欲しそうなこと言ってたし、下手に触らないほうがよい話題なのかもしれない。

よし、あの件は俺の心の中だけで閉まっておくことにしよう。そう思っていた矢先の出来事だった。

「カズ君、ちょっといい？」

俺はアリスに呼ばれた。

以前との違いはアリスの後ろにチルドもいたことだ。手招きされるままに俺は廊下に出た。

「何？」

俺は聞いた。

「この前のことで話がある…」

チルドとアリスの表情は真剣だった。

これはやはり、ビンゴとみていいんだよね？

俺は覚悟を決めて、二人が話を切り出すのを待った。

「この前、チルド君ちに泊まったときのことなんだけど……」

話すアリスの口調はいつもの陽気な口調じゃなくて、少し重々しかった。

「もう隠し通せないと思うから大胆に言うね。カズ君、あれ見たよね？」

あれ、というのはもちろん自分達の変身した姿だろう。だから俺から尋ねた。

「なあ、あの姿はアリスとチルドだったのか？チルドの召使いやっているおじさん達の話盗み聞きしたんだけど、天使とか悪魔とか魔王とかって何？そもそもお前らはほんとに大人なのか？」

「レッド、質問多すぎ。質問は必ず手を上げて、一つだけ言う」

チルドがほんとにどうでもいい突っ込みを入れる。でも、確かにいっぺんに質問したって子供の姿をしたこいつらじゃ全部を一度に答えることはできないだろうな。

「はい」

俺はチルドに指摘されたとおり手を挙げてどちらかが俺を指すのを待った。

「はい、カズ君！」

アリスがいつもの調子で俺を指名する。

「俺がこの間見た大人はアリスとチルドに間違いはありませんか？」
今思ったのだが、別に敬語にする必要はなかったんだよな。手を挙げるとか質問は一つずつとか言われると、ついつい授業中を思い出して丁寧語になっちゃうんだよな。

「そうだよ」

急にシリアスな表情でアリスが言った。

「あの姿は私達の本当の姿。アンドおじさん達の話聞いたのならだいたいはわかったと思うけど、私は天使でチルド君は悪魔。彼はその中でも特に秀でた魔王の家系なの」

「ま、おう……？」

アリスの口から発せられた突拍子もない単語に俺は一瞬だけ我を失いそうになった。

第21話〈三つの歴史〉

魔王。

その名に聞き覚えはあった。太古の人間界を破滅に追い込み、魔人戦争が始まったきっかけを作った悪い奴だ。戦争の結果は人間が大敗を喫したが、悪魔達も大分負傷してしまったため自らの世界へと帰っていった。これにより、人間界が征服されるという最悪の事態だけは免れたが、その後数百年間世界は暗黒の時代をたどったという話だ。

昔、俺の婆ちゃんが何度もその話をしてくれた。

「そのお話は多分チルド君のお父さんの時代の話だね」

俺が覚えている限りで話した昔話に、アリスは興味深そうに頷いた。それにしてもアリスの奴、今なんと言った？

チルドのお父さんの時代の話？

「そうだよ。だって魔人戦争って確か三千年位前の話でしょ？それって、チルド君のお父さんが魔王に就任した年だもの」

アリスは「そうだよね、チルド君」と確認すると、チルドは小さく頷いた。

「まあ、その話は後で話すとして、要はあたしたちは人間とは別種族って言うことになるわけ。実を言うとさ、この間、カズ君を迷いの森から救い出したのは、あたしなんだよ？」

「ええ！そ、そうなのか！？」

「そうだよお。もう、あの時のカズ君の顔、最高に面白かったわ。」

思えばカズ君の泣き顔を見たのは今回が初めてだったかも」

アリスは大層おかしそうに、愉快そうに笑った。いや、笑ったなんてかわいらしい感じじゃなかったな。あれは完璧に笑い転げている。

「どうして俺がチルドの家に行くって知っていたんだ？」

俺が聞くと、アリスは笑い転げるのをやめて続きを話した。

「だって、その日あたし日直だったじゃない。日直日誌を先生のところ届けにいったら、先生にいつもチルド君と一緒に帰っている子を教えてって聞かれたの」

「それでか」

「ここだけの話、あの迷いの森はチルド君のお父さんが作ったものなんだよ」

なんだって？

森を作った？

にわかには信じがたい話だった。だって、普通に植物の種をまいて、芽が出て細い木になって……森になるまで何百年もかかるんじゃないかって？

「それをこなすのが魔王じゃない。魔王様に不可能はなし！」

「なくし」

チルドは嬉しそうにアリスの語尾を反復した。こいつのマイペースぶりはたいしたものだよほんとに。

「じゃあ、森の入り口にあった立ち入り禁止の札は……」

「あれもチルド君のお父さんが親切心で立てたのよ。でも、人間の中には悪い人もいるから、乗り越えて森の中に入っちゃったらしいんだよね。そしたら案の定出られなくなってゲームオーバーって」
人が死んだという思い話なのに、こいつはなんてあっけらかんとしているんだろう。

「だって、立ち入り禁止と書かれているのに入るのが悪いんだよ」
アリスは正論を言った。

「待つてよ。アリスは天使だろ？いくら悪いことをした人間でも助けるものじゃないのか？むしろ、助けて更生させるのが仕事だろ？」俺がそう言うのと、アリスは困ったように眉を細めた。

「昔はそうだったよ。でもね、いくら私達が人間にこれをしては駄目、あれをしては駄目と言っても結局またやっちゃうのよね。ほら、よく言うじゃない。駄目っていわれると余計にやりたくなるって。あれとおんなじ。だから今の天使界の方針では、『天使とは人間をよい方向に導く道標であって、強制的に導く者ではない』ってなっているの」

「ふん…」

正直この時はよくわからなかったが、アリスの言い分から察するに悪いのはどうも人間の心にあるらしかった。

「まあ、そこまでお節介な天使も今は稀だねえ」

「アリスは違うのか？」

「え？どうしてそう思うの？」

アリスがきょとした顔で聞き返した。

「だって、昨日のアリスってどう思い返しても、お前がさっき自分で言ったお節介そのものだったじゃないか」

「う…」

アリスは墓穴を掘ったと言わんばかりに言葉を詰まらせた。口ではああ言っているけど、本当のアリスは困っている人間や、悪い人間を放っておけない性格のようだ。

「カズ、あまりアリスをいじめないで。アリスは天使界の常識を話しただけ」

チルドが少し怒ったようにつぶやいたので、俺はそれ以上彼女に何も言わなかった。

「カズ、他に質問ある？」

おっと、すっかり忘れていた。

「お前ら、ほんとは何歳なんだ？」

それである。この間の姿から察するに、二十歳は超えているだろ

う。それになぜ学校、しかも小学校に入る必要があったのか。

「レディーに歳を聞くのは失礼だよ」

「別にいいじゃん。言って減ったり増えたりするわけじゃないんだし」

そう言うと、アリスは深いため息をつきながら「八七〇歳だよ」と渋々つぶやいた。

「はい？」

目が点になるとは、まさにこういうことを言うのだろう。驚きを通り越して、なかなか小粋な冗談に聞こえてくるぞ。

「冗談違う。天使界や魔界では人間界と時間の流れ方が違う。それに、寿命も違うんだ」

チルドが説明する。

「ちなみにチルド君は九五三歳だよ」

きゆうひやくごじゅうさん？

あまりに突飛な数字過ぎて俺の目もつと点になった。

「人間界換算すると、私達の年齢はだいたい十二歳くらいかな」

「そうなんだ…」

ということはこの姿が本来の姿というわけか。

「違う」

チルドが素早く突っ込んだ。普段ボケ役のチルドに突っ込まれるとは思わなかったな。

「本来の姿はカズが昨日見た姿。種族が違っても二十歳くらいまでの成長過程はほとんど人間と変わらないんだ」

「じゃあ、どうしてこんな姿にまでなって人間の小学校に入ったんだよ。まさか人間の生活に触れてみたかったとかそんな理由じゃないんだろ？」

俺の言葉に二人は黙って顔を見合わせる。

「カズ君、今日暇ならうちにこない？実を言うとね、私達もどうしても人間の学校に入るように言われたのか、あまりよく聞かされていないんだ。だから、ちょうどいい機会だし」

「でも、俺が行っても大丈夫なのか？」

「全然平気だよ。私の家は多分カズ君も知っているはずだよ」

俺の知っている場所？

俺達男子グループがよく行く秘密基地のことか？しかし、そんなところにはアリスが住んでいるとは到底思えないし……。

じゃあ、一体どこのことを言っているんだろうか。

休み時間終了のチャイムがタイミングよく鳴り、この話は下校時間まで打ち止めになった。

第22話〈駄菓子屋とメル姉さん〉

下校時間になり、アリスは約束どおり俺を自分の家に招待するから一緒に帰ろうと誘ってきた。チルドもついてきていることから、どうやらこいつも最初から呼ばれているようだった。

それにしても気になるのは、俺がアリスの家を知っているらしいということ。

どういうことだろう？俺はこいつの家に行ったこともなければ知りもしないはずなんだが。それに、女の子の家にいきなり押しかけていっても大丈夫なのだろうか。

「カズ君、さっきからだんまりだけど大丈夫？」

見兼ねたのかアリスが俺の顔を覗き込もうとしてきたので、俺は思わず顔を背けた。

変な想像をしている顔なんて見られたくないからな。

「はい、とーちゃーく！ここがあたしの家だよ」

「ええ！ここだったのか？」

これは仰天物だった。

アリスの家はなんと俺が小さな頃から悪ガキグループとよく買いかけていた駄菓子屋だった。

「ね、カズ君もよく知ってるところだったでしょ？」

アリスは得意気に胸を張った。

確かによく知っていた。

駄菓子屋と言えば普通誰もがだいぶ年を食った婆さん辺りがここにこしながら、時に怒鳴ったりして子供達を迎えてくれるというイメージがあると思う。が、この町の駄菓子屋は全く逆のパターンだった。店番をしているのは若くて、俺のような子供でも、うつとりするくらい美人で、しかもいつも俺達を優しく見守ってくれている太陽の人だった。怒鳴ったりはしないが、一度悪さをすれば恐怖のくすぐり地獄が待ち構えているという点で恐れられもしていたが、

基本的に怒らせなければ人畜無害、いや、俺のような子供を含めた町人全員の癒しだった。

ということは、アリスはあの人の娘だったのか。

「そういうこと」

アリスはやはり得意気に胸をそらした。

「あんなに美人でしとやかな人からどうしてアリスが生まれたんだ？」

あの人は外で遊ぶよりは室内で本を読んでいるほうが似合う。それにくすぐりを除けば暴力を振るうこともないだろうし……。

「なごお！」

アリスのチョップが俺の頭に炸裂する。

「カズ君、もっと殴られたいのかなあ？」

アリスは笑いながら指をばきばきと鳴らしている。

「あらあら、騒がしいと思ったら貴方達だったのね」

噂の張本人登場。小学校の中学年くらいを最後にこの駄菓子屋も護符沙汰だったが、あいかわらずメル姉さんは綺麗だった。

「カズ君、お久しぶりね」

「メル姉さんも久しぶり」

「メル姉さん！？」

俺の言葉にアリスが素っ頓狂な声を上げた。

「お母さんって、そんな風に呼ばれていたの？」

「ちよっとびっくり……」

アリスだけでなく、チルドも珍しく目を丸くしていた。娘からしたら、母親が姉さんなんて呼ばれていたら、少なからず驚くことだろう。

「そうよお。だって、まだまだ若いですもの」

メル姉さんの、このほんわかした喋り方もずいぶんご無沙汰だ。

「さあ、ここで立ち話もなんだから中へ入りなさい。カズ君も今日はそのつもりで来たんでしょ？」

「え、あ、うん……」

あれ？どうしてメルさん、今日俺が来ることを知っていたんだ？
アリスが事前に話していたのかな。

ともかく俺はアリス達についていくことにした。

第23話〈親娘〉

駄菓子屋の奥は今時ちよつとみかけない和風作りの家になっていた。

「俺、畳なんて初めて見た」

「そうなの？ 冬は少し寒いけれど夏は風が入ってとても気持ちいいわよ」

メル姉さんは嬉しそうに説明してくれた。

「カズ、畳って何？」

俺の後ろでチルドがつぶやいた。まあ、あんなお城に畳なんてあるわけではないよな、と思いつつ俺は自分の知っている限りで畳の説明をした。

「今では、茶道でも使っているのを見たことないぜ」

「そうなんだ」

「チルドも、アリスの家に来るのは初めてなのか？」

俺の質問にチルドは小さく首を縦に振った。

「アリスのお城には何度も行った。けど、こっちの家は初めて」

またわけのわからないことを言い出したが、まあいい。どうせこれも後で聞けばわかることだ。

「ここで待ってて。今、お菓子を持ってくるから」

「「はぁーい」」

アリスとチルドは素直に返事をする、障子を開けた。

「おう、アリス帰ったか」

障子を開けた途端の大声&だみ声。そして、客間のど真ん中にでーんと座っている大男。

「何、この人？」

思わずつぶやいてしまった。しかし、それより先にアリスのほうが大男のほうに飛びついていった。

「お父さん、久しぶりだね。元気にしてた？」

「おう。アリスも元気そうで何よりだ」

「もう何年ぶりになるかなあ」

「そうだな、ざっと二年半ぶりってところか？」

親子の再開をしている後ろで、俺はひそひそとチルドに耳打ちをした。すると、チルドはいつものようにやる気のない顔のまま「そっか。カズは知らなかったよね」と言っ、この親子のことを話してくれた。

「アリスは二年半前にこっちの世界にやってきた。人間界を勉強するため。アリスのお父さん、天使界の中で最も偉い人。だから一緒にくることはできないって……」

なるほど、そういうことか。二年半前ってことはアリスは九歳か、十歳ってところか。やっぱりまだまだ両親が恋しい年頃だよなあ。……うん？ちよつとまてよ。こいつらのこの姿は仮の姿なんだろう。

本来はものすごく大人で、それで親父が恋しいっていうのはちよつと想像つかない。

「そんなことない。僕も、父さんや母さんと離れ離れになるのは寂しい。いくつになってもそれはかわらない。アリスは女の子だからなおさらそう」

「……」

俺は黙って親子の再会を見ていた。確かに、いつも無意味に元気なアリスだが、その無邪気さも今日は嬉しさからなのかもしれない。

「おじさん、久しぶり」

チルドが礼儀正しく正座をしながら、アリスの親父に挨拶をする。

「お、おお。えらくおとなしく、しかも礼儀正しくなったもんだな

……」

アリスの親父は戸惑った様子でチルドに挨拶を返す。

「びっくりでしょ、お父さん。あのチルド君がこんなにおとなしくなっちゃうなんて」

「ああ。本当にあの剣のように冷めた性格になっているな」

アリスの親父はどこか拍子抜けしたとでも言いたそうな顔をしている。

「お前だけだったんだがなあ。わしの稽古の相手になる奴は。少しだけ戻ってくれんか？」

親父の言葉にチルドは静かに首を振った。

「今はカズがいる。カズ、あの姿になった僕をあまり好きじゃないから」

「そうか。そう言えばすっかり忘れていたが、君がカズ君か」

「あ、はい」

親父に目を向けられ、俺はいつになく緊張した。

「まあ、そんなに堅くならんでもいい。こいつらを人間界に出した以上、人間に正体がばれるという危険性も考えなかったわけじゃない。君をとって食おうなんて考えてはおらんよ」

「そ、そうですか：」

安堵した。とりあえず、ここから生きて返してはもらえそうだな。

「ハハハ、ほっとしたか」

親父は家中に響き渡るような大声で笑った。

この人の前だと、なんだか俺の存在が小さく見えるな。

「わしは天使界の長。長が人間を襲って食ったりなんかしたら、下の者や次の世代の者に示しがつかんよ。それに、いつもアリス達が君の世話になっているから褒美をやりたいくらいだ」

一緒にいるだけで褒美をくれるとはお金持ち（？）　は違うなあ。

「お茶が入りましたよ」

滑らかに障子が開かれ、メル姉さんはてきぱきとした手つきで俺達にお茶の入った湯飲みを置いた。

「ごめんねカズ君、チルド君。うちの残ったお菓子ばかりで」

「全然へーき」

「そうだよ。メル姉さんとこのお菓子はしばらく食べてなかったから嬉しいよ」

「ふふ、ありがとう」

メル姉さんはにっこりと微笑んだ。

「それにしても魔界のはどうした？」

親父が茶をすすりながら声を荒げて言った。

メル姉さんも困った顔をしながら「さっきから何度も連絡は入れているんですけど……」と困った表情でつぶやいた。

「そう言えば、チルドの両親ってどんなのなんだ？」

「もうすぐ来ると思う。その時にわかる」

チルドは相変わらずそっけない返事しか返さなかった。

あまり触れられたくない話題だったのだろうか。

第24話〈魔界のマドンナ〉

そんなことを思っていると、障子の向こうから廊下を踏みしめる音が聞こえた。しかも、メル姉さんのようにしとやかではなく一歩一歩わざと音を出しているようにも聞こえるような歩き方だ。

「やつほー、お久しぶりねえ！」

障子の開け方も乱暴だし無意味にハイテンションのこの美女は誰だー！

思わずそう叫びたくなるほど、彼女の登場シーンは愉快なものだった。しかもそれだけではとどまらず、いきなり俺達三人を抱きしめ、キスまでし始めたではないか。

ほんとになんだ、この人！？

「母さん……」

だいぶきつく抱きしめられているはずなのに、チルドは平然とした顔のままその美人に向かって母さんとおつやいた。

「勝ったんだね？」

チルドの一言に美女は嬉しそうに大きく頷いた。

「そうなのよー、もう今のあたしたら超ついているのよ。だからね、今日もいーっぱいお土産買ってきたのよ。ほら、チルドの好きな魔界いちご大福もばっちり買ってきたわよお」

「魔界いちご大福……」

あの無表情がゆっくりと溶けていく。

いや、とろけていくの間違いだな。それにしても母親がこの場に來ているのだったらチルドの父親もここに來ているはずだよな。しかし、チルドの親父の姿はどこにもなかった。

「ところでナナル」

アリスの親父が咳払いをしながら美女の名前を呼んだ。

「あらドライブ。相変わらず渋い顔をしているわね」

「お前のその性格も相変わらずだな。ところで、ジャックリースはどうした？一緒に来たのではないのか？」

「知らない。今日ここに来ることはわかっていたみたいだけど、昨日はかなり仕事が忙しそうだったから、もしかしたらそれが延びているのかもねえ」

「それでお前は相変わらず遊び歩いておるのか？」

アリスの親父の目が光ったような気がした。

「まあねえ」

ナナルは実にすました表情で言った。

なんだか軽そうな人だなと思ったら遊び人だったのか。だから服はだらしないし、髪もぼさぼさだな。風呂毎日入っているのか、この人は。

「ナナルおばさんはそれでも魔界一の美女なんだよ」

アリスが俺に耳打ちした。

これで魔界一だって？

どこをどう見たらこんな人が綺麗に見えるのだから……。

「そうよ、ボク。千年に一度の魔界美女コンクールで断トツトップの優勝を果たした乙女、それがあたしよ」

ナナルはそう言って子供の俺に色っぽいポーズをとってみせながら「アリスちゃん、これでもは余計よ」と言っ、笑いながら目だけアリスを睨みつけていた。

「貴方がチルドの言っていたボーヤね。ふーん、なかなか可愛いじゃない。人間を手下にするならこういう子がいいなあ」

ええ！？この人、実はショ○なのか？まあ、そんな気がせんでもないが。

俺は人間を手下にするという悪魔の言葉よりもそっちのほうにシヨックを受けた。

「ふざけるのもそのあたりにしておけよ、ナナル」

アリスの親父が口をすっぱくして言う横で、ナナルは口を尖らせながら「わかってるわよお」とぼやいた。

「あら、やっぱりいらしていたのね」

「やつほお、メルさん。久しぶり」

「久しぶりすぎです」

メル姉さんはため息混じりに言いながら、湯飲みをナナルの前に置いた。

「貴方がきているから、てっきりジャックリースさんもきていると思ったのだけど」

「それがそうじゃないのよお。あの人ったらあたしより仕事のほうが大事らしいのよねえ。まあ、そのほうがあたしはあたしの仕事ができるいいけどね」

「……そっちのほうも相変わらずなのね」

メル姉さんはさっきからため息をついてばかりだ。

無理もないか。普通に考えたら一児をもつ母がこんなだらしのない遊び人じゃ、不安になる。というか、こんな母親がいるのによくチルドは非行に走らないものだ。そこはやはりチルドだからなのだろうな。

「メル、お前もそろそろ座りなさい。時間にルーズな奴だが、十分以上遅れたことはないからな」

「ほんとなら、十分でも遅刻は遅刻なんですけどね」

メル姉さんの口からまたため息が漏れる。どうやらメル姉さんとチルドの両親とはあまり仲が良くないようだ。アリスの親父も、そんなにいい顔はしていないみたいだから、どちらかと言えば嫌いなのだろう。

第25話く魔王ジャックリースく

「すまん……遅れた」

三度障子が開き、外から長い銀髪を束ねた長身の男が姿を現した。
「父さん……」

チルドが長身の男に向かってぽそつとつぶやいた。長身の男もチルドを見るなり、その場にしゃがみこみ「久しぶりだな……」とか言いながら頭撫で始めている。

「久しいな、魔王ジャックリース」

なんだって。今、アリスの親父はなんと言った？

確かに『魔王』と言ったよな。てことはこの長身の男が魔人戦争を引き起こした張本人で、チルドの親父なのか？それにしても男の俺が見てもこの人ってかっこいいな。透きとおるように綺麗な赤眼だし、長い銀髪も後ろで丁寧にまとめてられている。なんだか、ナルといい、チルドの親父ジャックリースといい、チルドの両親はとてつもなく変わり者のようである。
それも両極端に。

「ナルから聞いたが仕事をしていたのか？」

「その通りだ。最近は少しばかり景気が悪い。あんたのところは大丈夫なのか、ドライブ」

「わしのところも今のところは大丈夫だ。しかし、最近の若い者は力任せに事を運びすぎる傾向がある故、衝突は避けられんな」

「魔界まがいもそんなところだ。魔界の若者は血の気が多すぎて苦労する」
うわあ、子供いることそちのけで景気の話をしだしたよ。それにしてもこの二人の話しぶりからすると、魔界も天使界もさほど人間界と社会制度は変わらないんだな。もうちょっとおどろおどろしいものかと思っていた。

「彼が、例の少年か？」

チルドの父、ドライブは俺を見るなり丁寧にあいづろしてきた。俺とてもこの人が魔王だなんて信じられない。こういう美形で笑顔や礼儀正しさの似合う親父って世の中にたくさんいるぞ。授業参観とか出席したら父兄にも生徒にももてること請け合いだな。

「早速でなんだが、そろそろ例の話に入ろう。アリス、チルド、お前たちもそろそろもとの姿に戻りなさい」

ドライブに言われ、アリスは太陽の首飾りに、チルドは大剣に手を添え目をつぶる。

二人の体が明るく輝き、そのシルエットは徐々に子供から大人へと変化していった。

第26話くやってきた理由く

「お父様、ジャックリースおじ様、ナナルおば様、お久しぶりです」
「うっす、親父にお袋。それとドライブの爺さん」

「誰が爺さんだ。まだ老け込むのは早いわ」

……なんとも対照的な挨拶だ。アリスとチルドって元の姿と仮の姿で性格がまるで正反対だ。

「お父様、今日の御用件は？」

「ふむ、兼ねてから言っておることだがお前達の……」

「ちょ、ちょっと待ってくれよ爺さん」

「爺さんではない！！」

ドライブは本気で目を吊り上げている。どうやら見た目が老けていることを本気で気にしているみたいだな。外見だけなら五十前後に見えなくもないよな。

「カズがいる前でいきなりその話かよ。てか、俺達についての話は？今日はそのためにカズも呼んだんだろ？」

「まあまあチルド。そう慌てない慌てない」

一応息子をたしなめているつもりなのだろうが、ナナルさんがやるとどうにも単に「めんどくさいから黙ってて」と言っているようにしか思えん。

「天使と悪魔のことについてはカズ君にちゃんと話します。カズ君は偶然とはいえ、この子達の本来の姿を見てしまった。それに対する対処はしておかなければなりません」

対処。

メル姉さんの言ったこの二文字の言葉に俺は生唾を飲み込んだ。それを察したのかジャックリースが小さく微笑みながら俺に言った。「もう聞いているかもしれないが、我々が人間を襲ったのは過去の

話だ。今はそんなことは絶対にしないと約束する。君がチルド達の正体を見たから口封じをすることはない。気楽に聞いてくれてかわないよ」

どこかやる気のない口調だったが、その中には優しさみたいなものも含まれていたと思う。どこかやるきのない言い方ながら妙に安心できたのもそのせいだ。

「それでは改めて議題に入ろう。前々から保留状態にあったお前達の結婚についてそろそろ考えようと思うのだが」

「け、結婚!？」

なんだかとてもない議題なんですけど……って思っているのはどうやら俺だけらしく、チルドもアリスもまたかと言わんばかりにため息をついた。

「そのための人間界来界だということを忘れてはおらんよな？」

「「……」」

ドライブの厳しいまなざしに、アリスもチルドも黙ったままだった。

「なあ、ほんとにこの期間が終わったら即縁談を組まされるのか？」

乱暴そうなチルドの顔がこれでもかというくらい引きつっている。

「そうだ。お前達は魔族、天使族初の双間結婚ということになる。となれば、当然言い表せぬくらいの苦勞が出てくる。年をとってからその苦勞に直面してでは遅いのだ」

「お父様……」

アリスは不安そうな表情で父親の顔を見る。

「で、でもよ、天使界の奴らも魔族も俺達の結婚なんて簡単に認めてくれるって。そんなにせくことはねえって」

「そーゆーわけにはいかないのよ」

ナナルが人差し指を降りながら「甘いわねえ」とつぶやく。

「魔族の中にもいまだに天使族を嫌う者がいるように、天使族の中にもいまだに魔族を嫌う者がいるのよ。千年経って少しはマシにな

ったかと思えばそうでもないみたいだし」

「それは仕方のないこと。天使族との間とも長い間我らと戦争が絶えなかったから」

「でも、戦争はいつも貴方達悪魔が仕掛けてきたじゃない！」

「わかってる。しかし、その血の気の多さを治そうとしている者もいる。だから、一概に責めないでやって欲しい、メル」

「……ごめんなさい」

メル姉さんはしゅんと頭を下げた。

「話がそれているぞ。それにあまり難しい話ばかりではこの子が退屈してしまう」

ドライブはそう言って半分寝かけている俺をちらりと見た。

「そうね。あんまり大人の話につき合わせては悪いし、ボーヤにわかるようにナナルお姉さんがサクッと説明してあげますか」

「ナナル、あまり関係ないことを話すなよ。お前の話はたまにものすごく話題が飛ぶ」

「あら、失礼ねえジャック。あたしがそんなことをするはずないじゃない。いい。ねえ、チルド？」

「いや、親父の言うとおりだと思うぜ。お袋の説教は説教くさくないから嫌いではないけどよ」

「ていうかこの人が他の人間——おっと、悪魔だから魔族だったな——に説教なんかする筋合いがあるのか？」

俺にはそっちのほうが気になる。

「あーら、それはとんだ勘違いよボーヤ」

「げっ！今の独り言聞かれていたのか。」

「これは人間にも言えることだと思うけど、人って年を食えば食うだけそれに伴った経験や知識つてのが身につくものなの。本人が望む望まないに関係なくね。それは本や学校で教わる知識とはまた違うものなのよ」

「ふーん、つまり人生経験の長さの違いってやつ？」

「ま、平たく言えばそういうものね。学校に行っているから誰かに

説教していいなんて決まりはどこにもないわ。ねえ、メルさん？」

「まあ、そのとおりではありますね」

肯定はしているものの、やはりメル姉さんはこの人の意見に賛同したくはなかったように思える。

「ナナル、また話がそれている」

「わかってるわよ！」

ナナルは睨むようにジャックリースに顔を向けるものの、すぐに俺のほうに戻して話を続けた。

第27話 く挟まれた存在

人間界ではあまり知られていないと思うけど、あたしたち悪魔と天使はね、この惑星^{ほし}が誕生した頃からいた生き物なんだ。これがまた生まれた時から既に仲の悪い種族でね。些細なことでよく喧嘩をしていたらしいの。ぶっちゃけて言っちゃえば、悪魔がその辺りにごみを捨てていったとか、天使が口やかましすぎだとか。

——ナナルさん……。

はいはい、わかってるってば。まあ、とにかくもう何十億と、あたしらはそんなしょうもないことでいちいち喧嘩して、運が悪いときには戦争をおっぱじめていたってわけ。でもね、今から大体三千年位前に争うことをやめたんだ。もちろん、どうしてこんな些細なことで戦争をしあっていたんだろうって疑問もあったみたいだし。いまさらかよ、とか言うんじゃないわよ。それに、そのころにはだいぶお互いの文明も進歩していて、いつまでもあたしらが戦争をしていると間にはさまれて生活している人間界の連中に苦勞をかけてしまうことになると思うからね。だから、天使界と魔界での争いはここで終わったんだけど……。

——人間との戦争……

そう。ボーヤの言うとおり、今度は人間があたしら悪魔に挑戦状を叩きつけてきた。悪魔族が天使族と和解をしたころには、だいぶ人間界の歴史も動いていたようだしね。最も、そっちでいう……えーと、なんだっけか、江戸町時代だっけ？

——ナナルおば様、それって室町時代のことですよね？

そうそう、それ。人間界がその室町時代って頃の時にはうちらはもう、現代の人間界のような発達した文明になっていたからね。向こうが刀や火縄銃なんてのをパンパン使っている間に、魔界最先端の小型長距離ミサイルが飛んでいったからね。

結果はもう人間達の惨敗。それでも人間達はしぶとくあたしらに

挑戦を挑んだ。人間ってのは結果が見えていてもしぶとく喰らいついてくる。あたしら悪魔にはまるで理解できない思考だけど、その根性だけは気に入っていたよ。

——そうなんだ。じゃあ、今の地球人をみたら幻滅したんじゃないの？

うーん、そうでもないかなあ。ボーヤの言うとおり根性はなくなったのは事実だけど、その代わりのものを手に入れてすごく満ち足りているように感じるよ。

——確かにその通りだな。昔は天使が人間の行いを監視し、非行に走ればすぐさま注意を促していたものだが、最近の者達はあまりそういうことをしなくなったな。

——でも、ニュースではよく犯罪特集とかやってるよ。

——それでも、日本の非行問題についてはずいぶんと改善されているわ。昔は人間一人に天使一人というのが当たり前だったもの。

ボーヤの言うとおり、人間自体の非行や、犯罪問題はまだ完全になくなっていない。でも、あたしら人間達と戦争をしていた時代や、その直後の時代はひどかったもんよ。まあ、おかげであたしらの仕事はやりやすかったけどね。

——悪魔は人間をそそのかすっていうやつ？

うん。でも、時代が進むに連れてだんだんあたしらの誘惑に乗らない奴らも増えてきたけどね。

——……………。

まあ、とにかくそんなこんなで今から大体千年位前に人間との戦争も終わったわけ。

それからしばらく経って、なかなか友好関係を見せようとならない天使界と魔界のことが問題になって、うちの旦那とドライブが緊急協議を開いたのよ。あたしやメルさんも参加させられてね。あの時ちょうどいい当たりがきていた時だったのにさあ。

——ナナル…。

はいはい、わかってますってば。その緊急協議の結果ね、あたし

らの子供達を結婚させようってことになったのよ。つまり許婚ってことね。

——い、いいなずけえ？

アハハ、ボーヤにはまだ気の早い話だったかな？でも、許婚って言ってもすぐに結婚させるわけじゃないんだよ。その時は、この子らも本来の姿でもまだあんたと同じくらいの背格好だったんだし。

——はあ……。

——つまり、悪魔の子と天使の子を結婚させることで、悪魔と天使という相入られなかった種族が仲良くできることを示そうとしたのだ。もともとわしとジャックリースとの間に関係はあったし、この子らの仲がともよかったこともあったしな。

まあ、そんなわけでまだ小さかったこの子達を騙くらかして許婚の話を進めるのは非常に楽だったわ。

——騙くらかしてって……。

——ああ、いいから気にするな。

——そうだよレッド君。おば様のおかげで私はこうしてチルド君のもとにいられるわけだし……。

まったく、昼間からお熱いこと。そこまで相手のことを思っていてどうしてすぐに結婚に結びつかないのよ。いい年して恥ずかしいと思わない？

——それとこれとは話が別だろが。……それに、俺達は別に結婚なんかしなくても今のままのほうが楽しいしよお。

——それに私、結婚ってよくわからないんです。

とまあ、毎回こんな調子なのよ。ボーヤからも二人の友人としてなんかビシッと言ってやりなよ。

——ビシッとねえ……それよりもおばさん、悪魔と天使のいきさはわかったけど、人間界に来るのはどうしてかまだ話してなかったよな？

チッ、上手く逃げやがったわね。まあ、その説明ならすぐに終わるから話してあげるわ。その間に上手くこの二人を陥れる名台詞で

も考えておいて頂戴。あたしら、て言うかあたしはこれが初めてだけど、別種族があんたらの世界にくるようになったのはつい最近のことよ。理由は人間の生活や、恋愛について触れるため。

——人間の生活や恋愛に触れる？どうしてそんなことするんだよ？悪魔には悪魔の天使には天使の恋愛の仕方があるんじゃないの？もちろんあるわよ。でも、これから悪魔と天使が恋愛して、結婚することを考えて見なさい。どちらの風習にあわせてらいいかわからなくなるでしょ。

——あ、そうか。

だから、間をとって人間界の生活様式や恋愛の様子を学ぶようにこの子達を送り出したのよ。

——そうだったのか。

はい、説明終わり。さあ、ボーヤ。ビシッと言ってやって頂戴！

第28話〈愛の形〉

大変なことになったな……。

どうして子供の俺がこんな大人の話につきあわないといけないのだろう。だいたい、結婚の話なんて俺にはまだ早すぎだ。にもかかわらず、俺の横にいるこのナナルとかいう悪魔のおばさん——もといお姉さん——は容赦ない。

だいたい、俺の一言でチルド達が変わってくれるとは思わないけどなあ。

『…………』

その場の全員の視線が一斉に俺に集まる。

あゝあ、なんでもいい大人が——もとい天使と悪魔が——こんな子供の言う一言にこんな真剣になれるんだろう。普通だったら笑って済ます場面だろう、ここ。

『…………』

そんなことを愚痴っている場合じゃないか。とりあえず何か言わないと……。

「えっとさ、子供の俺に許婚とか恋愛ってのはよくわからないけど、二人がそのままを望むって言ったらそれで済むんじゃない？」

「駄目よ、そんなの！」

「お前、今のナナルの話をちゃんと聞いていたのか？我々にはあまり時間がないのだ。もたもたしておったらまた戦争に……」

「だったらその時はさ！」

猛反対するメル姉さんとドライブの言葉を遮り、俺は大声で言った。

「その時は、こいつらを戦前に引き出して、二人に言わせりゃいいんじゃないの？『こんなの間違ってる。天使も悪魔もこんなに仲良くなることのできるのに』とか言いながら抱き合ったりとか」

「えゝ！！」

「おい、カズ……」

アリスは顔を紅潮させ、チルドは恥ずかしそうに後頭部を掻いている。

「だいたい、アリス達もアリス達だ」

「え？」

「お互い好きなんだろう？ だったら、もう少しそれを形で表したらいいんだよ。いつまで経ってもお友達みたいな間隔でいるから皆が心配するんだ。少しでも変わったところを見せてやったら、絶対誰も文句は言わないって。その変化がいずれ、二人を結婚に導くんだから」

「あ……」

「ぐむ……」

俺の言ったことに、誰も反論はしなかった。

部屋中に沈黙が訪れる。しかし、その沈黙は長くは続かなかった。

「このお、言ってくれるじゃない！」

いきなりナナルに首を羽交い絞めにされた。

殺られる！？

そう思った。しかし、ナナルはすぐに俺の首に巻きつけている腕を放して豪快に笑った。

「どことなくさい決め台詞を言ってくるかと思ったたら真正直すぎだわねえ。ま、子供のボーヤにしてはいいと思うわよ」

ナナルはそう言ってニヤリと笑った。

「君の言うとおりだよ。この子らが原因で戦争を起こしてしまったときにはこの子らの製造元であるあたしらが責任を取らないといけないんだ。そんでもって、その場で言わせるんだ。例の文句をさ」

例の文句、とはおそらく俺がさっき勢い任せて言ったあれのことだろう。チルドとアリスの顔が一瞬で朱に染まる。

「まあ、言わんとすることはわかったよ。レッド君、君はけっこう

演説家に向いているかもしれないね」

険しかったジャックリースの顔がふっと緩まる。

「わしらとしては早く結婚をしてもらいたいのだが、彼の話を聞いていると、どうやらわしらにも非があったみたいだな」

「そうですね。そんなに長くは待てないかもしれないませんが、もう少しだけ今のままでも良いですね」

ドライブもメル姉さんもやわらかい笑みを浮かべた。この様子だとどうやら、俺の一言で収集がついたみたいだ。ここまでかっこよく決めという、反論されたらどうしようかと思っただけ。

「カズ君、顔が青いけど大丈夫？」

アリスが心配そうに俺の顔を覗き込む。

「え？俺、そんなにやばい顔してる？」

顔を触りながら慌ててそう言うのと、アリスだけでなくその場の全員が頷いた。

「そうか、お前これで決まらなかったら殺られるかと思ってたろ？」

チルドが今にも噴出しそうになりながら言う。

「べ、別にそんなこと思ってなんか……」

「正直になれよ。あの台詞もなんだかいっぱいいっぱいみたいな感じだったのはそのせいかな」

チルドはついに笑い出した。

皆、大声で笑い始めた。責められているのは俺なのになぜだろう。気がついたら俺も笑っていた。

「カズ君、今日はごめんね。なんだか、いつらい雰囲気場所に無理矢理つき合わせてしまった」

ひとしきり笑い終えた後、アリスがおどおどと俺に話しかけてくる。

「気にすんなって。結果的にはこうして生きているんだし。それに……」

俺はこいつらに言おうか言うまいか悩んでいた言葉をグツと喉の近くまで持ってくる。

「お前らの正体を知ることができてよかったと思ってる。なんていうか、今日のことって、お前らが俺に悩みを話してくれたみたいなしチュエーションだろ？　なんか嬉しくってさ。これは人間だけじゃないかもしれないけど、友達のことを知ることができたときって一番嬉しいんだ」

「カズ、ありがとよ…」

チルドはそう言ってぶっきらぼうに右手を出した。

「あんまりこういうのはこっぱずかしくてできなかったけど、お前やアリスとならそれでもできる気がするぜ。その…もう少しの間だけど、よろしくな」

「ああ」

チルドの手の上に俺の手が乗り、その上にアリスの手が乗った。

三人とも種族は違うのに、とてもとても暖かった。

第29話（時は流れて）

今日はいよいよ長かった小学校生活の最後、卒業式だ。

桜のつぼみがぽつぽつと目立つようになる中、俺達は最後の通学路をチルドとアリスと一緒に歩いていた。

「今日で小学校生活も終わりかぁ。長かったなぁ」

「カズ君、普通短いなぁって言わない？」

「カズ、感覚変」

「うおい、たった一言で変人扱いかい」

俺達はいつものように何気ない話をしながらゆっくりと通学路を歩いていく。

「なぁ、お前らほんとに今日帰ってしまうのか？」

俺は答えをわかっていて二人に聞いた。

「カズ君……」

「カズ……」

二人は頷く代わりに力なく俺の名前をつぶやくだけだった。

「なんかさ、実感が湧かないんだ。お前らと去年初めて会ったなんてさ。なんだか、もうずっと昔から友達だったような気がしてならないんだ」

「それはあたし達も同じだよ、カズ君」

アリスが寂しげにつぶやいた。

「もっと早くから会っておきたかったな」

「カズ、言っていることがさっきから死離滅裂だよ」

「うっさい！」

俺はもう耐えきれなくなってやつ当たりのように叫んだ。

「わかっている、わかっているよ！俺だって、何を言っているかわからないよ！だけど、だけど……」

俺の目から涙が溢れ、頬を伝う。

「やっぱり嫌なんだよ、お前らと今日でお別れなんてさあ……」

くそ、止まれ！

止まれよ、涙！

今日は絶対にこいつらの前では泣かないって決めていただろうが！
しかし涙を止めようとすればするほど、俺の目から滝のように大粒の涙が落ちていく。

どのくらいの時間、そうして泣いていただろうか。もうすぐ、卒業式が始まってしまうというのになんという醜態だ。

「二人とも、ごめ…んよ。もうすぐ……卒業式が…始まっちゃう。人間界の最後の日……なのに」

俺の言葉は半分嗚咽が混じっていて良く聞き取れなかったかもしれない。しかし、二人は何も言わず小さく横に首を振るだけだった。俺はこの時、初めて二人に甘えた。アリスとチルドは俺が完全に泣き止むまで何も言わず、そばにいてくれた。近くにあった時計はもうすぐ九時半になろうとしている。

三人とも三十分以上もの遅刻だな。

「ありがとう、二人とも。そろそろ行こうぜ」

俺は最後にティッシュで鼻をひとかみして立ち上がった。

「うん」

「行こう」

こうして俺達は一時間近く遅れて学校にたどり着いた。担任の先生には怒られることはなかったが、代わりに隣のクラスの先生に怒られた。どうやら、うちの担任は俺達が心配で寝込んでしまっていたらしい。俺達が来るなり、両腕を大きく開いて俺達を抱いた。この年になるとそういうのって結構恥ずかしいものだが、今日だけはそんなことはなかった。

第30話〈卒業証書授与〉

卒業式は体育館で行われた。

今でこそ、空調設備が整った体育館だからいいが、昔はそんなものはなく、皆寒い思いをしてきたらしい。それにしてもあいかわらず変わらないのが校長の無駄話。中学校に上がっても規則正しくだとか、目標を持ってだとか、いつも終業式に言っていることとさほど変わらないような気がする。ただ、その熱のこめ方がいつもと若干違うだけで。どうしてこの制度まで伝統で片付けるのだろう。この無駄話すらなかったら卒業式らしく晴れやかに学校をされるというのに。学校の校長だけは何年経っても進歩がなかったんだな、きつと。

「それでは続きまして、卒業証書授与に移ります」

俺達の担任が凛々しい顔で俺達のほうを向く。

「一番、アリス・アストグレーさん」

「はい！」

アリスの元気の良い返事は始業式の日のことを思い出させた。

そう、自己紹介で、担任に名前を呼ばれた時もこいつは元気で明るい返事をしていたっけ。それでいきなり、「みんな元気か！」って叫んだときは面白かったな。あの時は変わった奴だと思っていたけど、これがあいつの長所でもあった。誰とでもすぐに打ち解けることのできる明るさ、優しさを兼ね備えた女の子。それは、天使が元々から持っている慈愛の優しさというよりも、限りなく人間の女の子が持っている優しさに近かった。

「十九番、チルド・ニルソン君」

「はい…」

ドドド――

俺のクラスだけ、その場でこけたような気がした。まったく、こいつは最後までこんな腑抜けた返事をしやがる。でも、そこがこいつの見所でもあるからな。

チルド、こいつも自己紹介の時のエピソードがあったな。確か、担任に名前を呼ばれても返事がなくて、よく見たら目を開けて寝てたんだよな。どこのクラスにも必ずあいうマイペースな野郎はいるから、最初は気にもとめていなかったが、思えばあいつも人に好かれやすい奴だった。最初は猫をじゃれているところを俺とアリスが発見し、こいつにも少なからず何かを惹きつける魅力があるものと思った。俺とアリスの説得で――説得なんかしたっけか？――クラスに少しずつ馴染んでいった。あまり自分から話さない無口な奴だけど、あいつの数少ない表情を俺は好きだった。

「俺は……好きだったぞ」

「お、おいカズ、大丈夫か？」

俺の隣に座っていた奴が心配して小声で俺に話しかけてきた。俺の目からはいつの間にかまた涙が零れ落ちていた。そして……

「三十一番、渡辺和也君」

「はい」

そうだ、もう考えるのはやめよう。俺がこんな顔じゃ、あいつらだって満足してもこの世界に帰ることなんてできやしない。

こいつらの友人であったことを誇りに思おう。

俺は体育館の床を一步一步踏みしめながら壇上へと向かう。途中、チルドやアリスが座っている席の横を通った。

彼らはきっと俺のほうを見ただろう。

本当なら彼らに目配せの一つでもしてやりたかったが、俺は心の中だけで留めた。

第31話くさよならは言わないく

卒業証書授与が終わり、担任との最後の別れも済んだ。

俺達はこれで本当に最後になる学校への通学路をゆったりとした足取りで歩いていた。

「先生、大泣きしてたね」

アリスがはにかみながらつぶやいた。

「そうだね…」

「やっぱり、どこの世界でも別れる時は悲しいよね」

「そうだね…」

さつきからアリスとチルドは笑って俺と会話しようとしなない。

「でえーい、ぬるいぞ貴様らぁ！」

俺は二人の横頭を必殺ギリギリ攻撃で締め上げた。

「い、痛い！痛いよ、カズ君！！」

アリスはあわあ言いながらその場でもがき、チルドは攻撃されているというのに相変わらずの無表情だった。

「卒業式だからしんみりするのも多少はわかる。だけど、もう終わったことなんだ。一生会えないってわけじゃないだろうが！」

「カズ君達はそうかもしれないけどあたし達は……」

「だったら！」

俺は叫んだ。

「だったら、またここにくればいいんだよ。そうすりゃ皆と会えるよ」

「で、でもあたし達が人間界に過剰干渉するのは厳しく禁止されていて……」

「そんなもん、お前らの権限で乗り越えて来い」

「そんなぁ。無茶だよお」

「無茶でも、たとえ不可能と言われていることでも、好きな奴らのためになら俺は全国民を敵に回したっていい！」

そう、こいつらが来たためになにか厄介ごとが起こってもその時は俺がこいつらを守るんだ。

「カズ君……」

アリスの目が少し潤む。

「人間界にはな、同窓会って言って、クラスの仲間達が集まって一緒に酒を飲んだりする会があるんだ。その時になっても、絶対来いよ！俺、お前らの家に招待状を必ず出しに行くからな！どこにいうと、必ず出しに行くから！」

「カズ……」

「ありがとう、カズ君……」

アリスがついに泣き崩れた。

チルドも、泣いてこそいなかったが、その綺麗なオッドアイにはうつすらと光るものが浮かんでいた。

現在（2）

「ふう…」

俺は頭を休める意味もこめて一つ小さなため息をついた。

やはり俺は筆をとるよりも、人前で演説をしていたほうが気楽でよい。俺のこのつたない文章で少しでも話の内容を理解してくれたら嬉しい限りである。

少しばかり親身に話をしすぎて目的の場所を通り過ぎてしまったが、まあいいことにしよう。どこかで転回すれば済む話だ。

そういえば、俺がどこに行くのかまだ教えていなかったな。俺がこれから向かう場所は料亭雄山^{おすやま}。東京内では有数の超高級和食料理の店である。今日は卒業して数回目になる小学校時代の同窓会をやる日で、今回の幹事は俺になってしまったのだ。職業上、こういう店に詳しい俺はクラスの仲間達と何度も予算について話し合った結果、たまには贅沢をしようということでの店を選んだのだ。本来ならば、あの店は会社の社長など、一部の金持ちしかいけない店なのだ。

もちろん、俺自身はあまり金には縁がないのだが、政治家なんてやっていると、こういう店に引っぱりだこにされることも少なくない。俺だって本当はこんな店の料理よりかは、うちに帰ってゆっくり酒を飲みながら食事をするほうが好きなのだが、どうも変な爺や親父に無理矢理引っ張られていってしまうのである。そのくせ、仕事でここぞという時には俺のような若い者に任せっきりにしやがって、いい根性してるよな。

おっと、すまない。年をとるとつい愚痴っぽくなっちまう。政治

家の中ではまだ若い俺だけど、やっぱり三十を過ぎちゃうと知らず知らずのうちにおじさん化していくんだなあ。

小学校を卒業してからいろいろあった。中学、高校とサッカー部に所属していたので一時はサッカー選手になろうと思い、きつい練習にも取り組んでいたのだが、外国語の授業でたまたま発表した英語のスピーチを評価され、世界外国語スピーチ大会なんてものにだしてもらい、ベスト五に名を連ねた。それからというもの、俺はサッカー部を退部し、ひたすら外国語の勉強と、論文やスピーチの特訓に励んだ。昔、誰かが言っていたように、俺は結構演説家としての能力はあるみたいなので、ものにするまでにそんなに時間はかからなかった。それでも、少なからず挫折はしてきたが。

その間にもアリスやチルドに手紙を出すことは忘れなかった。チルドの家は迷いの森ごと消えてなくなっていたが、俺はそこに自作の手紙受けを作り、そこにチルドへの手紙を。もとアリスの家だったあの駄菓子屋には、アリスの手紙を預かってもらっている。いつかあいつらがこっちに帰ってきたときのために。しかし、あいつらからの返事が来ることは、この二十年近く一度もなかった。去り際に聞いた、魔界や天界では人間界と時間の流れが違うということだろうと思い、敢えて返事を強要するような文は書かなかったが、暇があれば姿を見せてくれと書いたことは何度もあった。

奴らの手紙の返事がこないからといって、俺は奴らのことを片時も忘れたことはない。俺の心の中にはいつでもあいつらがいた。そして、挫折した時、嬉しかった時、悲しかった時はいつもあいつらに話を聞いてもらった。

「どこにいらっしゃるんだよ…。今回はいつになく高い店を選んだんだぜ？ お前らの分も、きっちり入れて予約したんだ。来ないと金と料理が無駄になっちゃうんだぞ。だから……」

くそ、ふがない。

俺の目にまた涙が浮かんでくる。

もう泣かないと二十年前のあの日に決めたのに……

現在（おまけ）　く大円団く

時間より五分ほど遅れて料亭雄山おすやまに到着した俺は、クラスの皆が待つ座敷へと案内された。

座敷では皆まだ料理や酒に手をつけてはいなかった。

「おお、今回の主役のお出ましだぞ」

「なんだよ、今回の主役って」

おそらく幹事のことだろうと思いつながら、俺は空いている場所に座った。

「チルドとアリスは来たか？」

俺の問いかけにクラスメート達は揃って首を横に振った。

「そうか、一体どこで何をやっているんだかな」

「なあ、和也…」

俺の横に座っている男——名無しも可愛そうなので友人Aにでもしておく——は小声で俺に話しかけた。

「チルド達と一番親しかったのはお前だよな？お前、あいつらから何も聞かされてないのか？中学校はどこにいくとか、日本のどこに引越すとかさ」

「わからない。あいつら、俺に何の断りもなく引越してしまったから」

「そうか……」

友人Aは残念そうに俯いた。

これまで何度か同窓会を開いてきて、アリスとチルドが出席したことは一度もない。最初の頃は、悪魔と天使の結婚ということいろいろ問題でも起きていたのだろうと思っていたが、回を増すに連れ、どうやらそうではないことがわかってきた。さっきも言ったように人間の世界とあいつらの世界では時間の流れ方が違う。厳密に言えば魔界と天界も時間の流れが若干違うことも、子供の頃チルド

の召使い二人組に聞いた覚えがある。だから、もう彼らはよぼよぼの年寄りになってしまっているのかもしれない。

「アリスは女にしては結構勝気なところがあつたしさ、絶対酒に強いよな」

「いや、あれで結構弱かったりしたら可愛いと思うぞ」

「お前、まだアリスを諦めてなかったのかよ？」

「あいつにはチルドがいるのになあ」

「チルド君って変わった人だったけど、優しかったよね」

「そうそう、昼休みに学校の裏庭で猫の世話してたの私知ってるよ」
「それ私も知ってる」

クラスメート達から口々にアリスとチルドの話題が沸き起こった。毎回、話題に出るのだが、今日のはまた格別だな。でも、あんまり度が過ぎると後でしんみりしてしまつて乾杯ができなくなると困るし、一度ここらで止めておいたほうがいいだろう。

「はいはい、ちゅうもくく！」

俺は両手を叩き、全員をこちらに注目させる。

「皆、あいつらのことについていろいろ言いたいことはあるかもしれないが、とりあえず先に乾杯をしよう。せっかく俺お勧めのいいお店なんだからしっかり味わってくれ！それじゃ皆、グラスを上」
俺の指示で全員がグラスを天井に向かって掲げる。

「かんぱーい！」

「」「かんぱー……」「」

「ちよーっと待ったあ！！」

突然の叫び声とともに、勢いよく戸が開かれる。皆、何だ何だとグラスを置いて騒ぎ始めた。戸の向こうにいたのはどう見ても俺達の知らない人物。

「あ、あれえ？何、この間は？」

勢いよく戸を開けた女性は気まずい雰囲気を読み取ったのか、チラリとうしろを振り返った。

「何で皆白けちゃっている風味なのかな？」

「当たり前だ。物事には順序というものがある」

女性の後ろに立っている青年は冷静な口調でそう言うと、女性の横に並んだ。

「皆、久しぶり。だいぶ姿が変わって驚いているかもしれないけど、チルドとアリスだ」

チルドと名乗る青年がそう言うと、後ろでアリスを名乗る女性も照れくさそうに舌を出して笑っている。

「まさか、本当にお前らなのか……？」

俺は思わず立ち上がってつぶやいた。

男女は優しく微笑み、声を揃えて言った。

「「ただいま、カズ」」

その言葉を聴いた瞬間、俺は奴らに向かって走り出した。

何なんだ…。

何なんだよ…。

こんな粹な演出は設定した覚えはないぞ。だけど……。

だけど、どんな現れ方でもいい。あいつらが帰ってきた時は、俺の胸の中で「おかえり」と……。

アリスとチルドはやさしく俺を受け止めた。

「馬鹿野郎！ 帰ってくるのが遅いんだよ！ 俺達が、俺がどれだけお前らの帰りを待っていたと思ってるんだ！」

素直にお帰りとさえなかった俺の目から、二十年間封印していた涙が頬を伝って零れ落ちた。

「ごめん、カズ……」

チルドは俺の背中をさすりながら小さな声で謝った。

「そういえば、お前ら結婚どうなったんだ？」

ひとしきり泣いた後の俺の一言で、静まり返っていた会場が勢いを盛り返した。

チルドとアリスは最初こそ照れて何も話さなかったが、二人で何かを決意したのか互いに頷きあった。

「えっと、僕らはこの春結婚しました」

会場が『おゝ』と湧き上がる。

「それまでにちょっと家の問題とかもあったけど、こうして無事にチルド君と結婚できました。それもこれもみんな、カズ君のおかげです」

「え、俺の？」

俺は目を丸くした。

この二十年あいつらはここに来てないんだから俺が何かをした覚え

なんてないのだが……。

「またまたすつとぼけちゃって。手紙、ちゃんと読んだわよ」

アリスは嬉しそうに笑った。

手紙？　そういえば、なんかその手のことをあいつらが行ってすぐに書いたような気がしなくもないような。

「でも、子供の頃に書いたあんな拙い手紙なんて何の役にも立たなかったんじゃないか？」

「そんなことないよ。カズ君の手紙のおかげで、私達は何回も立ち直れたんだよ。カズ君は私達の恩人なんだから」

アリスに面と向かって言われ、俺は恥ずかしくなって下を向いた。
「それから、政治家になったんだってね。今日もテレビでなんか放送していたのみたよ」

「ああ、この間の討論会のやつな。難しくてつまらなかっただろ？」

「うーん、ちよつとね。でも、カズ君、すぐ立派になっててかっこよかったよ。」

一番はチルド君だけど」

アリスのその一言に、会場がまた沸きあがった。

そして、この二人を交えての新たな乾杯の儀式が始まった。

「えー、それではこれより六回目の同窓会を始めます。今回は私達のよき友人であるアリス・アストグレー氏とチルド・ニルソン氏をお迎えしましたの……」

「ナベ君、かっこつけすぎ」

「難しくてよくわからんぞー！」

「庶民にわかる挨拶をしてくださいーい」

「引っ込めー！」

「氏ねー！」

俺の丁寧な挨拶にクラスメート達は口々に野次をとばす。中にはただの暴言もあったが、それは温かい心でスルーしよう。とにかく

「乾杯！」

「「「かんぱーい!!」」」

夢にまでみたチルドとアリスとの再会。

二人が俺よりも年を取っていたらどうしようかと思って、会わなくてもいいかと思った時もあったけど、やっぱりこうして再開できたことは俺にとって一番の幸せだ。

今日が終わればまた、二人は元の世界に帰るだろう。でも、絶対にまた会えると俺は信じている。

「チルド、アリス。俺はいつだって待っているからな」

>おわり<

あとがき

こんにちは、新城寺ハヤトです。初めましての方、初めまして。他の小説を読んでくれている方、お久しぶりです。

今回はファンタジーはファンタジーでも現代ファンタジーといいますが、いわゆる主人公が剣で戦ったり、魔法を使ったりという話ではなく（まあ、多少戦っている部分もありましたが）あくまで天使や悪魔が自分と同じ町に住んでいて、同じ学校にいて、同じクラスメートだったらどうなるのかなあみたいなものをテーマに書いてみましたがいかがだったでしょうか。

もともと演劇の脚本用書き始めたのですが、気がつけばストーリーの大枠はそのままに細かいところを変えていき、この作品ができました。

『うらおもて』とあるように、この話のミソとなるアリスとチルドの性格は実際の姿と仮の姿とで大きく違います。小悪魔的発言をする少女が実は清純な天使だった…とかね。ともあれ、自分的にはラストシーンがいつ読んでも感動的で仕方がないのです。かなりウルつきます。皆様はどうでしたでしょうか？

え、ウルつとこない？この程度の表現でくるわけない？

ああ、すみませんすみません。かなり自己満足でした（爆）

さてさて、気を取り直しまして……。

……………。

ああ、話のネタが思いつきません!!

あとがきについて書いてもほんとに難しいなあ…。もっとネタのある生活が欲しいです。

それでは、次の作品で皆様のお目にとまれるように頑張ります。さよなら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4353c/>

悪魔と天使のうらおもて

2010年10月8日15時43分発行